

私家版『資本論』翻訳 第1巻第1篇第1章 商品

(テキスト原書: http://www.mlwerke.de/me/me23/me23_049.htm)

[Zur vierten Auflage](#) | [Inhalt](#) | [2. Kapitel. Der Austauschprozeß](#)

Seitenzahlen verweisen auf: Karl Marx - Friedrich Engels - Werke, Band 23, "Das Kapital", Bd. I, Erster Abschnitt, S. 49 - 98

Dietz Verlag, Berlin/DDR 1968

Erstes Buch

Der Produktionsprozeß des Kapitals

第1巻 資本の生産過程

Erster Abschnitt Ware und Geld

第1篇 商品と貨幣

ERSTES KAPITEL Die Ware

第1章 商品

<49> 1. Die zwei Faktoren der Ware: Gebrauchswert und Wert(Werts substanz, Wertgröße)

商品の二要因: 使用価値と価値(価値実体、価値量)

資本家的生産様式が優勢な社会の富は、“巨大な商品の集積”として表れ¹、個々の商品は富の **Elementarform** 要素形態として表れる。だからわれわれは商品の分析から研究を始める。

さしあたって商品は、ある外的な対象、その属性により人間の諸欲求を満たす一つの物である。それらの欲求が例えば胃から発するものであろうが、あるいは幻想から発するものであろうが、それら欲求の性質が事態を変えることはない²。同様に諸物がどのように人間の欲求を満たそうが、生活手段として直接に、すなわち飲食の対象として満たそうが、あるいは回り道をして、生産手段として満たそうが、ここではどうでもよいことである。

有用物のそれぞれ—鉄、紙等—は二重の観点、質と量の観点から観察されるべきである。物は多くの属性からなる全体であるから様々な側面でも有用であり得る。物のこれら様々な側面、したがって多様な使い方の <50> 発見は歴史的におこなわれてきた³。有用な諸物の量を計る尺度の社会的発見も同様である。商品量を計量する秤(尺度)が多様であるのは、一つには計量される諸対象の多様な自然属性に因るものであり、また一つには慣習に因るものである⁴。

ある物の有用性はそれを使用価値にする。が、この有用性は空中を漂っているものではない。有用性は商品体の属性により規定されているものであるから、その物なしには存在しえない。商品体そのもの、すなわち鉄、小麦、ダイヤモンド等それ自体が使用価値または **Gut** 財なのである。これらそれぞれの物の性格は、人にとっての使用属性が含んでいる費やされた労働の多寡に依存するものではない。諸使用価値の考察に当たっては、常に、それらがどれだけの量存在するか、すなわち1ダースの時計、1エレの亜麻布、1トンの鉄であることが前提されている。諸商品の諸使用価値は、独自の学問である商品学に材料を提供する⁵。使用価値が発揮されるのはその使用または消費においてである。使用価値は、その社会的形態がどのようなものであろうと、富の素材的内容をなしている。われわれにより考察される社会的形態において、使用価値は同時に交換価値の素材的 **Träger** 運び手である。

1 *Karl Marx*, "Zur Kritik der Politischen Ökonomie", Berlin 1859, pag. 3. <Siehe Band 13, S. 15> Karl Marx『経済学批判』、ベルリン、1859年、3頁。(Dietz 書店マルクス・エンゲルス全集第15巻、15頁。)

2 "「欲求は必要を含んでいる；それは精神の食欲であり、そして空腹と同様に肉体にとっては自然なものである・殆ど(の物)はそれらの価値をもち、したがって精神の欲求を満たす。」(*Nicholas Barbon*, "A Discourse on coining the new money lighter. In answer to Mr. Locke's Considerations etc.", London 1696, p. 2, 3.)

3「例えば磁石について言えば鉄を引き寄せせる点で常に同一である。」(同上、6頁。)
「そのように諸物にはある固有の *vertue* 長所がある。」(*vertue* は *Barbon* にあっては特に使用価値を指す。)鉄を引きつけるという磁石の属性は、人が磁石に磁極があるのを発見して初めて有用になったのである。

4 それぞれの物の自然的価値とは必然的な欲求を満たす、または人間の生活を快適にするのに役立つというそれぞれの資質のことである。」(*John Locke*, "Some Considerations on the Consequences of the Lowering of Interest", 1691, in "Works", edit. Lond. 1777, v. II, p. 28.) 17世紀にはついにイングランドの著述物に使用価値を表す“**Worth**”と交換価値を表す“**Value**”が登場する。こうした表現は、直接的な事柄はゲルマン語で表現し、考え抜かれた結果(概念—訳者)としての事柄はロマンス語で表すという生きた口語で全般に見られる傾向である。

*訳注 *gescichtlich* と *historish* の差、要検討。

5 ブルジョワ社会においては、どの人も商品購入者として辞書的な商品知識をもっているとの法的なフィクションが支配している。

さしあたって交換価値は、ある種類の使用価値が別の種類の使用価値と交換される⁶際の比率、割合、すなわち時と場所に応じて絶えず変化する関係として表れる。だから交換価値は偶然なそして純粹に相対的なもの<51>であるかのように見え、それゆえ、内的な、**valeur intrinseque** 内在的な交換価値をもつ商品というのは、一つの形容矛盾であるように見える。そこでこのことについてより詳しく考えることにしよう。

ある種の商品、例えば1クォーターの小麦はx量の靴墨、またはy量の絹、またはz量の金と、つまり様々な量の他の諸商品と交換される。すなわち小麦は唯一のではなく、多様な諸交換価値をもっているのである。が、x量の靴墨、y量の絹、z量の金等々は、1クォーターの小麦という交換価値なのであるから、互いに置き換え可能な、または相互に同じ大きさの諸交換価値なのである。したがって第一に、同一商品の有効な諸交換価値は同じものを表現しているのである。第二に、交換価値は一般に表現様式、交換価値とは区別される内容の“現象形態”であり得るのである。

更に、二つの商品、例えば小麦と鉄を取り上げよう。それらの交換関係がどのようなものであろうと、常に一定量の小麦が幾ばくかの鉄と等置される、例えば1クォーターの小麦が **a Ztr.**(a ツェントナー)の鉄に等置されるという一つの等式で表現可能である。この等式は何を意味しているのであろうか？ 同じ大きさの共通なものが二つの異なる物、1クォーターの小麦と **a** ツェントナーの鉄のなかに存在するということである。つまり両者は等しく第三のものに等しい、一方の物でも他方の物でもないものに等しいのである。両者のそれぞれは、交換価値であるかぎりでは、この第三のものに還元されなければならないのである。

このことを説明するには幾何学の単純な例が役立つ。すべての **gradlinigen Figuren** 直線で囲まれた図形はその面積を規定し比較するために三角形に分解される。三角形そのものはその外観上の姿とは全く異なる表現——三角形の底辺との高さの積の半分に還元される。同様に諸商品の諸交換価値は、それらがその多くの量を、あるいはわずかの量を表現する一つの共通なものに還元される。

この共通なものは、商品がもつ幾何学的な、物理的な、化学的な属性、あるいはその他の自然的属性ではあり得ない。およそ商品の身体的属性が考慮されるようになるのは、身体的属性が商品を有用に、つまり使用価値にするかぎりでのことである。他方で諸商品の交換関係<52>を明白に特徴づけるのは将に諸商品の使用価値の捨象である。交換関係の内部において一つの使用価値は、それが然るべき比率で存在する場合には、将しくそれぞれにとって別な商品のいくばくかと等しい。あるいは老バーボン **Barbon** によれば、

「一つの商品種類は、その交換価値が同じである他の商品種類と等しい。同じ量の交換価値をもつ二つの物のあいだには、いかなる相違あるいは差異も存在しないのだから。。」(編者注8)

使用価値としては、諸商品はなによりもまず相異なる質であり、交換価値としては、諸商品は単なる様々な量、すなわち一原子の使用価値をも含んでいないものであり得る。

商品の身体がもつ使用価値を無視すると、それに残るのは労働生産物という属性だけである。けれどもわれわれにとって、この労働生産物は手の中で既に変化している。商品体の使用価値を捨象するとき、われわ

6 「価値とはある物と別なある物との、すなわちある大量の生産物と別な大量の生産物との交換性のことである」(Le Trosne, "De l'Intérêt Social", [in] "Physiocrates", éd. Daire, Paris 1846, p. 889.)

それはそれを使用価値たらしめている身体的な諸要素及び形(かたち)も捨象する。それはもはや机でも、家でも、糸(撚り糸)、その他の有用物でもない。その全ての感覚的な諸要素は取り除かれている。それはもはや机をつくる労働の産物でもなければ、建築労働、糸を紡ぐ労働、あるいはその他の決まった生産的な労働の産物でもない。諸労働生産物の有用な性格と一緒に、商品の諸身体で表現されている諸労働の有用な性格が消え、したがってまたこれら諸労働の様々な具体的形態も消え、もはやそれら諸労働は互いの差異を消し去っているだけでなく、すべて同じ人間の労働、抽象的な人間労働に還元されているのである。

今度は、諸労働生産物に残っているものを観てみよう。それらに残っているのは、同じ幽霊のような対象性、単に無差別な人間労働のゼリー(凝固物)という性格、すなわちその支出の形式とは無関係な人間の労働力の支出以外の何物でもない。これら諸物が表しているのはただ、それらの生産には人間の労働力が支出され、人間の労働が積み重なっているということだけである。これらに共通の実体の結晶として、これら諸物は諸価値——諸商品価値なのである。

<53>諸商品の交換関係そのものにおいて、それらの交換価値は何かそれらの諸使用価値からは完全に独立なものであるかのようにわれわれには見える。今実際に諸労働生産物の使用価値を無視するなら、将に規定されたような価値だけが残る。交換関係または商品の交換価値に表れる共通なものというのはつまりはその価値なのである。考察が進むとともに、交換価値が価値の必然的な表れ、または現象形式であることを回顧することになるが、とはいえ価値はさしあたっては、その形式とは独立に考察されるべきである。

一つの使用価値または財は、人間の労働がそのなかに対象化されている、あるいは **materialisiert ist** 物質化されているがゆえに将に価値なのである。ではその価値の大きさはどのように測るのか？ それに含まれる“価値を形成する実体”、すなわち労働の量によってである。労働の量そのものはその継続時間で計測され、さらに労働時間には時間、日など一定の諸時間単位という秤(はかり)がある。

(このように述べれば——訳者)ある商品の価値はその生産中に支出される労働量に規定されるのだから、ある人が怠け者である、あるいは未熟であればそれだけ彼の商品はより大きな価値をもつことになる、というのも彼はその商品の制作により長い時間を費やすのだからである、と言っているように見えるかも知れない。だが、諸価値の実体を構成する労働は、同じ人間の労働、同じ人間労働力の支出である。社会の総労働力——商品世界の諸価値で表されている——は、ここでは一つの同一の人間の労働力と見なされる、たとえ総労働力というものが無数の個々の諸労働力から構成されていようとも、そうなのである。これら個々の労働力は他のものと同じ人間労働力である。が、それらが社会的な平均労働力という性格をもち、そしてそのような社会的平均労働力として機能する限りで、つまりある商品の生産に将しく平均的に必要な、もしくは社会的に必要な労働時間を使う限りで、そうなのである。社会的に必要な労働時間とは、現存する社会的に正常な生産諸条件をもって、また社会的に平均的な労働の熟練度及び強度をもって何らかの使用価値をつくるのに必要な労働時間である。イングランドにおいて蒸気動力を利用した織り機が導入されて以降、一定量の糸を織布に変えるのに以前の半分の労働で済むようになる。イングランドの手織り職人はこの加工のために以前と同じ労働時間を費やすのだが、彼らの個々の労働時間による生産物は今では社会的労働時間の半分しか表わしておらず、その価値は以前の半分に下落した。

<54>社会的に必要な労働の量、あるいはある使用価値を生産するのに社会的に必要な労働時間、これこそが使用価値の価値量を規定するのである⁹。個々の商品はここでは一般にその種の平均の見本と見なされるのである¹⁰。同じ大きさの労働量を含んでいる、あるいは同じ労働時間で生産可能な諸商品は、したがって、同じ価値量をもつのである。ある商品の価値が個々の他の商品の価値と関係するのは、前者の生産に必要な労働時間が後者の生産に必要な労働時間するようなものである。「全ての商品は諸価値として、定まった諸量の凝固した労働時間である¹¹。

その生産に必要な労働時間が不変ならば、商品の価値量は不変である。が、生産に必要な労働時間は労働生産力の変化に伴い変化する。労働生産力は多様な諸条件により規定されるが、わけても労働者の熟練度(平均的技能の水準——訳者)、科学の発展段階及び科学の技術的利用の進展度、生産過程がどの程度社会的に統合されているか、生産過程の規模及び **Wirkungsfähigkeit** 作用度、及び **Naturverhältnisse** 諸自然条件により規定されている。同じ労働の量でも有利な季節には8ブッシェルの小麦で表現されるが、不利な季節にはわずか4ブッシェルでしか表現されない。同じ量の労働が(鉱脈の——訳者)豊かな鉱山では貧鉱に比べてヨリ多くの金属をもたらす。ダイヤモンドは地表には現れておらず、その発見には費用がかさみ、したがって平均的に多くの労働時間を要する。その結果ダイヤは少量で大きな労働を表すのである。**Jacob** は、金は嘗てはその価値に対して十分な支払いを受けていなかったのではないかと疑っている。<55>このことはダイヤモンドについてはなおさらである。**Eschwege** によれば、1823年にブラジルのダイヤ鉱山の80年分の総産出量の価格は、同国の砂糖もしくはコーヒー農園の年平均産出量の1年半分の価格にも満たなかった、それらのダイヤがずっと大きな労働を表し、したがってずっと大きな価値をあらわしていたにもかかわらず、である。鉱山の鉱脈が豊であれば、同じ量の労働がヨリ多量のダイヤで表され、その価値は下落するであろう。ヨリ少量の労働をもって石炭をダイヤモンドに変えることができるものなら、ダイヤの価値が煉瓦の価値よりも下落することだってあり得るだろう。一般に：労働の生産力が大きくなればなるほどその物品を生産するのに必要な労働時間は短く、物品に結晶化している労働の量が小さいのであればそれだけその価値は小さい、のである。逆に労働の生産力が小さければそれだけ一物品の生産に必要な労働時間は大きく、その価値も大きい、のである。つまり、一商品の価値量の変化は、その商品で表されている労働の量に正比例し、その生産力に反比例する。<初版では次のような続きがある；われわれは今や価値の**実体**を知っている。それは**労働**である。われわれはその**価値量**が何であるかも知っている。それは**労働時間**である。将に交換—価値に価値を刻印する価値の**形態**は未だ分析されていない。だがその前にすでに見出された諸規定をいまいし詳細に展開しておくべきだろう。>

9 Note zur 2. Ausg. 第二版への注。"The value of them (the necessaries of life) when they are exchanged the one for another, is regulated by the quantity of labour necessarily required, and commonly taken in producing them." "Der Wert von Gebrauchsgegenständen, sobald sie gegeneinander ausgetauscht werden, ist bestimmt durch das Quantum der zu ihrer Produktion notwendig erheischten und gewöhnlich angewandten Arbeit." ("Some Thoughts on the Interest of Money in general, and particularly in the Public funds etc.", London, p. 36, 37.)前世紀のこの奇妙な匿名論文には日付が付されていない。が、その内容からして Georg II 治下の 1739~1740 年頃には出版されたのは明らかである。

10 「同一種類の生産物は全てある大量をなしている。それら大量の製品について、価格が一般的に、またそれぞれの特殊な諸条件を顧慮することなく決められるのである。」

11 K. Marx, l.c.p.6. <Siehe Band 13, S. 18>

一つの物は価値ではなくとも使用価値であり得る。人にもたらす利益が労働により媒介されていない使用価値の場合がそうである。そうしたものとしては、空気、処女地、自然の牧草地、自然林などがある。ある物が有用で、かつ、人の労働の生産物であるが、商品ではない、という場合もある。自分の生産物により自身の欲求を満たす者は、なるほど使用価値はつくるが商品をつくるわけではない。商品をつくるためには、人は使用価値だけではなく他人のための使用価値を、すなわち社会的な使用価値をつくるのでなければならない。{また(使用価値は——訳者)、単純に他人のためにだけ作られるだけではない。中世の農夫は、領主に地代として納める穀物を生産したが、それは坊主に納める十分の一税としても用いられた。が、領主に地代として納める穀物も坊主に納める十分の一税として用いられた穀物も、それらが他人のために生産されたといっても、そのことによって商品になったわけではない。商品となるには、生産物は使用価値として役に立つ他人のために、交換を介して譲渡されなければならない。}^{11a} 最後に如何なる物も、使用対象であることなしには価値ではあり得ない。ある物が有用でないのなら、それに含まれる労働も有用ではなく、労働としてはカウントされず、したがって無価値である。

2. *Doppelcharakter der in den Waren dargestellten Arbeit*

諸商品で表現される労働の二重性

(「諸商品の二重性として表現される労働の二重性」とも読める——訳者)

<56>当初、商品は二面的な物、使用価値及び交換価値としてわれわれの前に現われた。その後、労働も、それが価値として表現される限りでは、諸使用価値の生みの親である労働にみられる特徴をもはやもっていないということが明らかとなった。商品に含まれる労働がもっているこれら二重の性質を証明したのは私が初めてである¹²。この点は政治経済学の飛躍点をなすものであるから、ここでそれを精査しておこう。

二つの商品、たとえば1着の上着と10 エルの亜麻布を例にとろう。前者は後者の2倍の価値をもっている。だから、10 エルの亜麻布 = W とすれば、1着の上着 = $2W$ である。

上着は一つの使用価値であり、特殊な欲求を満足させる。上着をつくり出すためには決まった種類の生産的活動が必要である。この活動はその目的、作業の仕方、対象、手段と成果によって規定されている。そのようにその有用性が生産物の有する使用価値で、もしくはその生産物が使用価値であることによって表現される労働をわれわれは短く有用労働と呼ぶ。このような視点の下では、有用労働は常にその有用効果との関連において考察される。

上着と亜麻布とが質的には異なっている諸使用価値であるように、それらの定在を媒介している諸労働も

^{11a} 第4版への注。かっこ内の部分を書き入れたのは、この部分の省略により、マルクスにあっては、生産者である他人によって消費されるいずれの生産物も商品として認めている、とあまりにも頻繁に誤解されたからである。 F. E.

¹² 同上書、12、13 頁以下。

質的に異なる——裁縫と織布である。それらの諸物が質的に異なる諸使用価値ではなく、したがって質的に異なる諸有用労働ではないとすれば、そもそもそれらが諸商品として相対することなどあるはずがない。上着は上着とは交換されることはない、すなわち同一の使用価値が同一の使用価値と交換されることはないのである。

さまざまな種類の使用価値の全体あるいは諸商品体の総体には、**Gattung** 属、**Art** 種、**Familie** 科、**Unterart** 亜種によって区別されるさまざまな有用労働の総体——**eine gesellschaftliche Teilung der Arbeit** 労働の社会的な分割(いわゆる「社会的分業」——訳者)が現れている。社会的労働分割は商品生産の存在条件である。逆に商品生産が社会的労働分割の存在条件ではないとしても、そうである。古代インドの共同体においては、諸生産物が諸商品になるわけではないのに、労働は社会的に分割されている。あるいは、もっと身近な例をあげるなら、どの工場でも労働は<57>系統的に分割されてはいるが、この分割は、諸労働者による個別的な諸生産物の交換によって媒介されているわけではない。自立的で互いに独立している私的諸労働の諸生産物だけが諸商品として相対するのである。

すでに見たように、各々の商品の使用価値にはある目的の定まった生産活動あるいは有用労働が注ぎ込まれている。質的に異なる諸有用労働がそれらに注ぎ込まれていないのであれば、諸使用価値が諸商品として相対することはあり得ない。その諸生産物が一般に商品形態を纏う社会、すなわち商品生産者たちの社会においては、互いに独立している生産者たちの私事として営まれるこの有用労働の質的相違が発展して、一つの多肢的なシステム、すなわち一つの社会的な労働の分割(**eine gesellschaftliche Teilung der Arbeit** 社会的分業体制)となるのである。

それはそうと、縫子によって着られようが縫子の客たちによって着られようが、上着にとってはどちらでも同じである。いずれの場合にも上着は使用価値として機能している。裁縫が特殊な仕事、すなわち労働の社会的分割の自立した一分肢となっても、上着とそれを生産する労働との関係それ自体が変化するというわけでもない。衣服が必要なところでは、ある人が縫子になる前から、人類は何千年にも亘って裁縫をしてきたのである。一方で上着、亜麻布という定在すなわち自然には存在しない富の素材の要素をなすあらゆる物という定在は、常に、特別な目的をもっておこなわれる生産行為——特殊な自然素材を特別な人間の諸欲求に適合させる——によって媒介されているはずである。だから諸使用価値の形成者としては、すなわち有用労働としては、労働は社会のあらゆる形態から独立した人間の存在条件、人と自然との間の素材転換すなわち人間の生活を媒介する **ewige Naturnotwendigkeit** 永遠に自然で必然的な事なのである。

使用価値である上着、亜麻布など、つまり諸商品体は二つの要素すなわち自然素材と労働からなる結合物である。さまざまの有用労働——上着、亜麻布などに注ぎ込まれている——の全てが取り除かれると、その後には常に人の行為がなくても自然に存在する一つの素材をなす **Substrat*** 基体が残る。人がその生産においてできることは自然そのものすなわち諸素材の諸形態を変えるだけである¹³。さらに、この形態を変えるとい

13 「宇宙の全ての現象は、人の手または物理学の一般的な諸法則によって引き起こされるとしても、実際には新たな創造ではなく、単に一つの素材の形態変換でしかない。再生産という想定を分析する際に人間の精神がいつも見出すのは結合と分離だけである;原野の土地、空気及び水が穀類に転化する、あるいはまた人の手がある昆虫が吐き出す物を絹に換える、あるいは一まとまりの諸金属片の配置が決まって時打ち懐中時計ができるという価値(使用価値、フィジokratとの論争において

う労働<58>そのものにおいて、人は常に諸自然力に支えられている。だから労働だけがそれによって生産される諸使用価値、すなわち富の素材の源というわけではない。ウィリアム・ペティが言ったように、労働がその父であり、大地がその母なのである^[21]。

次に使用対象であるかぎりでの商品から、諸商品一価値の方に話を移そう。

われわれの想定によれば、上着は亜麻布の2倍の価値をもっている。だが、このことは一つの量的な差異であるにすぎず、さしあたってわれわれの関心を引くものではなかった。1着の上着の価値が10エルの亜麻布のその2倍であるなら、20エルの亜麻布は1着の上着と同じ価値をもっていることをわれわれは今も記憶している。上着と亜麻布は諸価値としては同じ実体からなる諸物、すなわち同一種類の労働の対象的な諸表現である。だが、裁縫と織布は質的には異なった諸労働である。とはいえ同じ人間が裁縫したり織ったりを交互におこなう、だからわが縫子が、今日は上着を、そして明日にはズボンをこしらえるという社会状態、すなわち労働の変形が同じ個人の労働を前提するというような、つまりこれら両方の労働の仕方はともに同じ個人の労働の諸変形であって未ださまざまな諸個人の特殊な固定的機能ではないという社会状態もある。現実が教えているように、われわれの資本家的社会では労働需要が増加する方向に、裁縫の形態でまたは織布の形態で一定割合の人間労働が供給されている。この労働の形態変換が摩擦なくおこなわれることはない。そうだとすると、それは実現されなければならない。生産行為からその内容を、また労働からその有用性をはぎ取ってみると、それに残るのはそれが人間労働の支出であるという事実である。裁縫と織布は質的には異なっている生産行為ではあるが、それらは人間の脳、筋肉、神経、手などがもつ力を生産的に費消することであり、この意味でともに人間労働である。<59>それらは人間の労働力を支出する二つの異なる形態にすぎないのである。もちろん人間の労働力そのものは多少なりとも開発されており、またあれやこれやの形態で支出されるべきである。そして商品の価値は単なる人間の労働、すなわち人間労働一般の支出を表わしている。ブルジョア社会では将軍あるいは銀行家は大きな役柄を、反対にただの人間はひどくみすぼらしい役柄を演じている¹⁴。同じことが人間の労働にも当てはまる。それらは単純な人間の労働力の支出であり、特別にそれを伸ばしたというわけでもないのに、大人であれば平均的に誰でもその肉体という機関のうちにもっているものなのである。**単純な平均労働**そのものも、国が異なり文化段階が違えば、確かにその性格も異なるのだが、一つの社会にはこれと決まった単純な平均的労働というものが存在する。複雑な労働はただ**強められた**あるいはむしろ**何倍か**の単純労働と見なされ、その結果、複雑労働の小さな量が大きな単純労働に等しいということにもなるのである。この還元がいつでもおこなわれていることは、経験が示す通りである。ある商品は複雑な労働の生産物であるかもしれない。その場合その価値はこの商品自身を単純労働の生産物に等置し、そのことによって

Verri は、どの種類の価値について論じているのかを正しくは理解していないのではあるが)「と富の再生産の場合も同じである。」(Piero Verri, „Meditazioni sulla Economia Politica“, -zuerst gedruckt 1771-in der Ausgabe der italienischen Ökonomen von Custodi, parte moderna, t. XV, p.21,22.)

[21] 索引付録[W.Petty.], „A treaty of taxes and contributions“, London, 1667, S.47, 58. (S. 848.)

14 Vgl. Hegel, „Philosophie des Rechts“, Berlin 1840, p. 250, §190.

* 訳者メモ: Aristotele の“Substrat 基体”概念について参考文献のうちネットで入手可能なものとしては、千葉恵『アリストテレスにおける力と運動』(http://wwwsoc.nii.ac.jp/gps/Ronshu/2004_1.pdf)、田子多津子『質量・基体・受け皿』(http://wwwsoc.nii.ac.jp/gps/Ronshu/2005_1.pdf)がある。またアリストテレス『形而上学』を参照。)

まさしく一定量の単純労働を表現するのである¹⁵。さまざまな種類の労働の統一単位への還元率はさまざまである。だが、それらの比率は生産者たちの背後にある社会的な過程を通じて固定されている。そのため彼らの眼には初めから与えられているものと映るのである。議論を単純にするために以下では、いずれの種類
の労働力も直接に単純な労働力とみなされる。そうすれば還元の手間も省けるからである。

それらの価値においては上着と亜麻布とのあいだの使用価値の違いが剥ぎ取られているように、これらの諸価値で表現される諸労働においても、それらの有用な諸形態すなわち裁縫と織布とのちがいは剥ぎ取られている。使用価値である上着と亜麻布は目的の決まった(それぞれの——訳者)生産行為と生地または糸との結合物であり、逆に価値である上着と亜麻布は単に同じ種類の労働のゼリーであるように、上着と亜麻布の諸価値の中に包まれた労働は、それらが生地と布に対するそれらの生産行為であるからではなくて、それらが単に人間労働力の支出であるからそのようなものと認められるのである。使用価値である上着及び亜麻布の **Bindungselemente** 結合元素<60>をなしているのは質的に異なる裁縫と織布である;裁縫と織布は、上着及び亜麻布の特殊な質が剥ぎ取られているかぎり、そしてそれら両者がともに人間の労働という同じ質を有しているかぎり、上着価値と亜麻布価値の実体なのである。

そもそも上着と亜麻布は価値であるだけではなく、一定の大きさの諸価値でもあって、われわれの想定によれば上着の価値は10エルの亜麻布の2倍である。両者の価値量の相違は何によるのであろうか? 亜麻布が上着のちょうど半分の価値しか含まない、すなわち後者の生産には前者の生産の2倍大きな時間に亘って、労働力が支出されなければならないことによる。

使用価値との関連では、商品に含まれている労働は質的なものと認められる。だが、価値量との関連では、それは量的なものとして認められる。そのことによって、それはもはや特別な質をもたない人間の労働に還元されているのである。あちら(使用価値との関連——訳者)では、どのようにが、そしていかなる労働であるかが重要であったが、こちら(価値量との関連——訳者)ではどれだけの労働なのか、すなわちそれらの継続時間が大事である。一つの商品の価値量はそれに含まれている労働の量を表わすのであるから、(価値量について——訳者)互いに釣り合いが取れている諸商品というのはいつでも同じ大きさの諸価値なのである。

生産力、たとえば1着の上着の生産に必要なあらゆる有用な諸労働の生産力が不変である場合でも、上着の価値はそれら自身の量とともに増加する。1着の上着がx労働日を表わすなら2着の上着は2x労働日を表わす等々。1着の上着に必要な労働が倍増する、あるいは半減するという場合を思い浮かべてみよう。初めの場合、いまや1着の上着は以前の2着の上着と同じ価値をもち、後の場合2着の上着は以前の1着の上着と同じ価値をもつことになる。いずれの場合についても、たとえ1着の上着が果たす機能が同じままであり、それに含まれている有用労働もあいかわらず同じ品質を保っているとしても、そうである。だが、1着の上着の生産に支出された労働量は変わっているのである。

一定量の使用価値そのものはいつでもある量の素材的富であって、2着の上着は(使用価値または素材的

¹⁵ 読者は、労働者がたとえば一労働日をかけて手に入れる賃金あるいは価値の話ではないことに注意せねばならない。そうではなく、その労働日が対象化する商品価値の話なのである。労働賃金という **Kategorie** 範疇はそもそもわれわれの叙述のこの段階では未だ存在しない。

富としては——(訳者) 1着の上着よりも大きい。2着の上着は二人のひとに着せることができるが、1着の上着は一人にしか着せることができない等々。それでも素材的富の量的増大がその価値量の減少と同時に発生することがあり得るこれらの相反する動きは二つの性質からなる労働の **zwieschlächtige**(Schlacht はここでは Art 性質、本質、種類の意味——(訳者)性格 **Charakter** に由来する。本来、生産力とは常に有用で具体的な労働の生産力であって、実際には、目的の定まった生産行為の一定時間あたりの作用度を意味する。したがって有用労働は、その生産力の増大または減退という変化に正比例して、**豊**かな生産物の源にもなれば**貧**弱な生産物の源にもなるのである。生産力の変化は、有用労働との関係の場合とは反対に、**<61>**価値で表わされる労働それ自体とは何らの関係もない。生産力は労働の具体的で有用な形態に帰属するから、労働の具体的で有用な形態が度外視されると直ちに、生産力が労働とは関わりをもたなくなるのも当然である。ある一つの同じ労働は、同じ時間内には、たとえ生産力が変化しても同一の価値量を産み出す。だが、労働は同一の時間内にもさまざまな量の使用価値をもたらす。すなわち、生産力はそれが増大すれば**多**くの、減退すれば**少**くない使用価値をもたらす。労働の豊穡度を高め、したがってその労働によってもたらされる使用価値の量を増大させる同じ生産力の変化——それが諸使用価値の生産に必要な労働時間の総量を短くするとしても——がこの増大した(諸使用価値——(訳者)総量の価値量を減少させるのである。

すべての労働は、一面では、生理学的な意味における人間労働力の支出であり、また同じ人間のあるいは抽象的な人間の労働という属性において、すべての労働は諸商品価値を形成するのである。すべての労働は、他面では、目的の定まった形態での人間の労働力の支出であり、またあらゆる労働はこの具体的な有用労働という属性において、使用価値を生産するのである¹⁶。

3. Die Wertform oder der Tauschwert

価値形態または交換価値

<62>諸商品は諸使用価値あるいは諸商品体、すなわち鉄、亜麻布、小麦などの姿でこの世に現われる。それらのありふれた諸自然形態である。だがそれらが諸商品で在るのは、ただそれらが二重の物、諸使用対象であり、そして同時に価値の **Träger** 運搬役(ポーター)だからである。したがって諸商品は自然形態と価値形

¹⁶ 第二版への注。「労働だけが最終的で真実の尺度であり、それによってあらゆる商品の価値は計られ、比較され得るのだ」と A. Smith はいう:「同一量の労働は、労働者自身にとってあらゆる時及び場所で同一の価値をもつはずである。労働者の標準的な健康状態、力及び活動の度合いと彼に備わっているであろう平均的熟練度をもって、彼はいつも同じ一人分の休憩、自由、そしてその幸運を任せるのである。」(“Wealth of Nations”, b. I, ch. V, [p. 104./105].) A. Smith はここでは(どこでも、というわけではない)、一面では商品価値を商品に支出された労働量によって規定することと商品価値を労働の価値によって規定することを混同し、それゆえ同一量の労働は常に同一価値をもつということを証明しようと試みている。他面では彼は、それが商品の価値で表現される限りでは労働は単に労働力の支出として有効であるが、この支出を次には単に休息、自由及び幸福を犠牲にすることだと理解し、正常な生活状態とは理解しない。もちろん彼が見ていたのは近代の賃金労働者である。一注の9に引用されている A. Smith の匿名の先行者ももっと適切なことを数多く語っている:「ある人は同じ欲求対象物の生産に1週間を使った...彼に別の(使用—訳)対象を交換のために差し出す人は、実際に同じ価値をもつのは何であるのか正しく評価できない、すなわち交換で譲渡する物の価値を見積もるときに彼が要した労働 **Labour** と時間がどれだけなのか評価できないのだ。そのことが現実の意味するのは労働の交換——一定時間内にある一つの対象に支出した労働ともう一つ別の対象に同じ時間内に支出されている労働との交換——だということである。」(『貨幣の金利に関する一般的諸考察』, “Some Thoughts on the Interest of Money in general etc.”, p. 39.) {第4版への注——略}

態という二重の形態を備えるかぎりでは諸商品として現われる、すなわち商品の形態をもつのである。

どこで諸商品の価値対象性を捕まえることができるのか、それを誰も知らない。その点で価値対象性は **Wittib Hurig** (Shakespeare, „König Heinrich der Vierte”, 「ヘンリー 4 世」の登場人物——編者注による) と違っている。感覚的には粗雑な対象である商品体とは逆に、諸商品の価値対象性には一原子の自然素材も含まれていない。だから個々の商品をどれだけ眺め回してみても、商品が、価値物としては掴まえることのできない代物であることに変わりはない。だが同じ社会的単位すなわち人間労働の表現である限りにおいて諸商品が価値対象性をもつということ、したがって諸商品の価値対象性が純粹に社会的であることを思い起こすなら、それが商品の商品との社会的関係のなかでだけ現われることができるということも理解されよう。実際われわれは諸商品の交換価値または交換関係から出発し、それらに隠れた商品の価値を探し当てたのである。

諸商品が、諸使用価値という多様な自然諸形態とは著しく対照的である共通の価値形態、--貨幣形態をもっているということは、誰でも、他のことは何を知らなくても、知っている。重要なのはブルジョワ経済学で未だ嘗て試みられなかったことをやり遂げることである。すなわち貨幣形態の創世記の証明、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な最も見えにくい姿から眩しい貨幣形態まで追い遂げることが重要である。それと同時に貨幣の謎も消えるのである。

明らかに最も単純な価値関係は一商品の、同じ値打ちをもつただ一つの他の商品との価値関係である。したがって二つの商品の価値関係は一商品の最も単純な価値表現を提供するのである。

<63> A) Die Einfache, einzelne oder zufällige Wertform

単純な、個別的なまたは偶然の価値形態

x Ware A = y Ware B または: x Ware A は y Ware B と同じ値打がある。

(20 エレの亜麻布 = 1 着の上着 または: 20 エレの亜麻布は 1 着の上着と同じ値打がある。)

1. Die beiden Pole des Wertausdrucks: Relative Wertform und Äquivalentform

価値表現の両極: 相対的価値形態と等価形態

この単純な価値形態には全ての価値形態の秘密が隠れている。だからその分析には固有の困難がある。

ここで種類の異なるふたつの商品 A と商品 B、われわれの例でいうと亜麻布と上着とは明らかに二つの異なった役割を果たしている。亜麻布はその価値を上着で表現し、上着はこの価値表現の材料になっている。第一の商品は一つの積極的な役割を、二番の商品は受動的な役割を演じている。最初の商品の価値が相対的価値として表現されている、あるいはその商品は相対的な価値形態に在る。二番目の商品は等価物として機能し、あるいは等価形態に在る。

相対的価値形態と等価形態は互いに関係し合い、互いに前提し合う不可分な二つの契機であり、だが、同時に互いに排除し合う、または対立し合う両端、すなわち同じ価値表現の両極である; 二つの形態は常に、

価値表現に関わる相異なる諸商品に別れて存在する。例えば亜麻布の価値を亜麻布によって表わすことはできない。 $20 \text{ エルの亜麻布} = 20 \text{ エルの亜麻布}$ はけっして価値表現ではない。この等式が言っているのはむしろその逆: 20 エルの亜麻布 は 20 エルの亜麻布 以外の何物でもなく亜麻布という使用対象の一定量でしかない、である。亜麻布の価値はただ相対的に、別な商品でのみ表現され得る。したがって亜麻布の相対的な価値形態は、何か他の商品が亜麻布に対し等価物の役に在ることを前提するのである。他方、等価物として登場しているこの別な商品が同時に相対的価値形態に在ることは不可能である。そのような関係はけっしてその商品の価値を表現するものではない。等価物の役に在る商品は他の商品の価値表現に材料を提供するのである。

もちろん、 $20 \text{ エルの亜麻布} = 1 \text{ 着の上着}$ または 20 エルの亜麻布 は 1 着の上着 に値するという表現は、逆の関係: $1 \text{ 着の上着} = 20 \text{ エルの亜麻布}$ を 1 着の上着 は 20 エルの亜麻布 に値する、を含んでいる。上着の価値を相対的に表わすためには等式を逆にしなければならないのである。だがそうすると直ちに上着に代わって亜麻布が等価物になる。つまり同じ商品が同じ価値表現において同時に両形態に在ることはできない。むしろ両形態は極として排除し合うのである。

<64>ある商品が相対的な価値形態に在るのか、それとも反対の等価形態に在るのかは、専らその商品が価値表現の度ごとに占める立場、すなわちその価値が表現される商品であるのか、それともそれで価値が表現される商品であるかに依る。

2. 相対的価値形態

a) *Gehalt der relativen Wertform*

相対的価値形態の内容

二つの商品の価値関係のなかに一つの商品の単純な価値形態がどのように隠されているかを突き止めるためには、さしあたり、価値表現の量的側面を無視して考えなければならない。たいていの場合、人は全く逆のことをする。すなわち価値関係のなかに互いに等置されている二種類のそれぞれ一定量の商品、それらのあいだの量的な比率だけを見るのである。互いに異なっている諸物のさまざまな大きさというものは、それらをそれらの同一性に還元した後に初めて比較可能になるのだが、そのことが見逃されるのである。それらは、それらもつ同一性を表現している限りにおいて同じ名前と呼ばれ、比較可能な諸量になるのである¹⁷。

$20 \text{ エルの亜麻布} = 1 \text{ 着の上着}$ であろうが、それとも $= 20 \text{ 着の上着}$ であろうが、 $= x \text{ 着の上着}$ であろうが、つまり一定量の亜麻布がそれだけの量の上着に値しようと、そのような比率はいずれも、亜麻布と上着は価値量としては同一のもの諸表現、同じ性質をもつ諸物であるのだということを含んでいる。同じ本質をもつ諸物が

¹⁷ S.Baily のような価値形態の分析に自ら従事した数少ない経済学者たちはこれまで何らの成果も達成しえなかった。それは第一に彼らが価値と価値の形態とを混同したからであり、第二には、彼らが実際的な市民たちの荒々しい影響下にあつて、最初から専ら量的な確実さ規定性に注目したからである。「Verfügung über die Quantität 量に対する指示だけが...価値を生む。」(“Money and its Vicissitudes (貨幣とその変遷)”, Lond. 1837, p. 11.) 著作者は S. Baily。

存在している。亜麻布＝上着の関係が等式の基礎にあるのである。

だが量的に等置されている二つの商品が同じ役割を演じているのではない。亜麻布の価値だけが表現されるのである。ではどのようにしてか？ 亜麻布が自身の「等価物」である上着に対し関係することによって、または自身と「Austauschbares 交換可能な物」である上着と関係することによってである。この関係において上着は価値の存在形態、価値物として通用する。というのは、そのようなものとして上着は亜麻布と同じだからである。他方では亜麻布自身の価値存在が現象している、あるいはそれが一つの独立した表現を獲得している。なぜなら価値としてのみ亜麻布は同じ価値をもつものである上着に、もしくは亜麻布自身と交換可能な物である上着に関係しているのだからである。あたかも(亜麻布は)自分とは異なる身体のプロピレン基から構成されている酪酸である。両者とも同一の化学的実体——炭素 C、水素 H、酸素 O、そして確かに同じ比率もつ組成物、**<65>**すなわち $C_4H_8O_2$ である。酪酸とプロピル基が等置されるなら、この関係のなかでは第一に、プロピル基が単に $C_4H_8O_2$ の存在形態と認められているのであり、第二には酪酸もまた $C_4H_8O_2$ から構成されていると言われているのである。つまりプロピル基を酪酸に等置することによって、酪酸のもつ化学的実体が酪酸の物体と区別されて表現されると語られるのである。

諸商品は諸価値としては単なる人間労働の凝固物である、とわれわれが言うなら、われわれの分析はそれらの諸商品を価値抽象物に還元するが、その分析はそれらの諸商品に自然形態と異なるいかなる価値形態も与えるものではない。一つの商品の別な商品に対する価値関係のなかでは事情は異なる。ここでは一商品の価値性格がその商品自身の別な商品との関係を媒介に現われるのである。

例えば価値物としての上着が亜麻布に等置されることによって、上着のなかに隠れている労働が亜麻布のなかに隠れている労働と等置される。確かに上着をつくる裁縫は亜麻布を作る織布とは違う種類の具体的労働ではある。が、織布との等置は裁縫を事実上両方の労働において作用している同じものに、人間労働というそれらに共通の性格に還元する。そしてこの回り道を通して次のことが示されるのである：織布もそれが価値を織る限りではなんら裁縫と区別する特徴をもつものではない、つまり抽象的な人間労働である。種類の違う諸商品の等価表現こそが価値形成労働の特殊な性格を現象させるのである。なぜならこの性格は種類の違う諸商品のなかに隠れている種類の違う諸労働を事実上それらの共通のものに、すなわち人間労働一般に還元するからである **17a**。

にもかかわらず、亜麻布の価値がそこから生じている労働の特殊な性格を表現するだけでは十分ではない。流動状態にある人間の労働力または人間労働は価値を形成する、が、それは価値ではない。それらは凝固した状態、すなわち対象的な形態において価値になるのである。亜麻布を人間労働の凝固物として**<66>**表現するには、その人間労働が亜麻布自身と物的に異なり、そして同時にその労働が別の商品にも共通する

17a 第二版への注。William Petty の後、価値の本質を見抜いた最初の経済学者の一人である著名な Franklin は語っている：「およそ取引というものは一つの労働を他の労働に対して譲渡することに他ならないのだから、すべての物の価値は労働で正確に計測されるのである。」(“The Works of B. Franklin”, edited by Sparks, Boston, 1836, v.□, p. 267.) すべての物の価値を「労働で」計ることによって彼は交換される諸労働の相違を捨象する。そしてそうすることで彼は諸労働を同じ人間労働に還元しているだが、そのことに Franklin 自身は気づいていなかった。彼はだが知らないことを語ったのである。彼は最初に「一つの労働」について語り、それから「別な労働について」語り、最後にはすべての物の価値実体である「労働」について、更なる証明を与えることなく語ったのである。

一つの「**Gegenständlichkeit** 対象的なもの」として表現されなければならない。問題はすでに解決済みである。

亜麻布の価値関係のなかで上着が亜麻布と質的に同じもの、すなわち同じ性質を有する物として通用するのは上着が一つの価値だからである。だからこの価値関係のなかで上着は一つの物——それに包まれて価値が現われる物、すなわちその手に掴める自然形態で価値を表現する物——として通用している。上着、すなわち上着商品の身体は確かに単なる一つの使用価値にすぎない。同様に一着の上着が価値を最上等の亜麻布の切れ端として表現しないのも確である。このことが証明しているのは、将に、上着は亜麻布との価値関係のなかではその外でよりも多くの意味を表すということである。モール付きの上着を着ている多くの人はそれを着ていないときよりも3倍多くを意味する。それと同じである。

実際に上着の生産では裁縫という形態で人間の労働力が支出される。すなわち上着に積み上げられているのは人間の労働である。この側面において上着は、たとえそれが擦り切れて大きく開いた糸目のあいだからその本質そのものが顔をのぞかせているわけでないにしても、「**Träger von Wert** 価値の担い手」である。そして亜麻布の価値関係のなかで上着は将にこの側面によって、身体を与えられた価値、価値体として通用する。上着の無愛想な外見にもかかわらず、亜麻布は同じ種族がもつ美しい価値魂を上着に認めるのである。だが、同時に亜麻布に対して、価値が上着という形態を取ることがなければ、上着が亜麻布と向き合って価値を表現することはできない。それは個人 A にとって王が個人 B の肉体の姿で現われるだけでなくその顔つき、髪の毛、その他容貌の多くをその都度君主となる者のものと取り替えるのでなければ、個人 A は個人 B を王の一人と認めて振る舞うことができないのと同じである。

だから上着が亜麻布の等価物を構成する価値関係のなかでは、上着形態が価値形態として通用しているのである。すなわち商品亜麻布の価値が商品上着の身体で表現される、つまりは一商品の価値が他の商品の使用価値で表現されるのである。使用価値としての亜麻布は感覚的には上着と異なる物であり、価値としての亜麻布は「**Rockgleiches** 上着と同じもの」であって、したがって一着の上着のように見えるのである。こうして亜麻布はその自然形態とは違う価値形態を獲得するのである。亜麻布の価値存在はそれ自身と上着との同一性において現われる。それはあたかも神の子羊との同一性において現われるキリスト教徒の羊という存在である。

以上みてきたように、商品価値の分析がこれまでわれわれに告げた全てのことを、別な商品である上着とつきあうや否や、亜麻布自身が語るのである。将に亜麻布はその思いを彼女だけが流暢に使える言葉、商品のことばでそっと漏らすのである。労働は人間労働というその抽象的な本質において亜麻布自身の価値をなすのだと言う代わりに、亜麻布は、上着はそれが彼女と同一のものとして有効である、すなわち(上着も一訳者)価値である限りでは、亜麻布と同じ労働からできているのだ、と言う。彼女の繊細な価値対象性はそのごわごわと固い亜麻布製の身体とは違うのだ、と言うために亜麻布は、価値は上着のように見え、したがって彼女自身が価値物としては上着と瓜二つなんだよ、と言うのである。ついでにいうと、商品語にヘブライ語以外にも正確さの度合いがさまざまな多くの別な方言があればよいのだが・・・ドイツ語の「**Wertsein** 価値存在」は、商品 B の商品 A との等置が商品 A 自身の価値表現であることを、例えばロマンシュ語の動詞 **valere, valer, valoir** ほど的確には表わさない。**Paris vaut bien une messe!** パリは祝福に値する!

<67> 価値関係に媒介されて商品 B の自然形態が商品 A の価値形態になる、または商品 B の身体が商品 A の Wertspiegel 価値を写す鏡となる¹⁸。商品 A は商品体である商品 B と関係をもつことにより使用価値 B を商品 A 自身の価値表現の材料にする。商品 A の価値、このように商品 B の使用価値で表現されて、相対的価値の形態を獲得するのである。

b) Quantitative Bestimmtheit der relativen Wertform

相対的価値形態の量的な規定内容

その価値が表現されるべきそれぞれの商品は一定量の使用対象、すなわち 15 Scheffel の小麦、100 Pfd. のユビなどである。この商品の一定量は人間労働のある限定された量を含んでいる。だから価値形態は必ず価値一般だけでなく量的に限定された価値あるいは価値量を表わさねばならない。したがって商品 B に対する商品 A、すなわち亜麻布の上着に対する価値関係では商品種・上着が価値体一般として質的に亜麻布に等置されるだけでなく、ある限定された量の亜麻布、例えば 20 エルの亜麻布に対し例えば一着の上着というある限定された量の価値体または等価物が等置されているのである。

等式：「20 エルの亜麻布＝1着の上着 または：20 エルの亜麻布は1着の上着に値する」の前提は、一着の上着は 20 エルの亜麻布とちょうど同じ価値実体を含むということ、すなわち、両方の商品量は同量の労働、もしくは同じ大きさの労働時間を費やした、ということである。だが、<68>20 エルの亜麻布もしくは一着の上着を生産するのに必要な労働時間は織布あるいは裁縫の生産力のそれぞれが変化するのに応じて変化する。そのような(それぞれの労働の生産力の——訳者)変化が価値量の相対的表現に対して及ぼす影響が詳細に研究されなければならない。

I. 亜麻布の価値は変化するが¹⁹、上着価値は不変である場合。亜麻布の生産に必要な労働時間が2倍になる、たとえば亜麻を植え付けている土地の不毛性が増大するにつれて亜麻布の価値は2倍になる。すなわち 20 エルの亜麻布＝1着の上着 ではなく、20 エルの亜麻布＝2着の上着 となろう。というのは今では1着の上着に含まれている労働時間は 20 エルの亜麻布の半分でしかないからである。逆に亜麻布の生産に必要な労働時間が半分だけ短くなる、たとえば織り機の改良によって亜麻布価値は半分だけ減少する。それに応じて今では次のようになる：20 エルの亜麻布＝1/2 着の上着。つまり商品 A の相対的価値、すなわち商品 B で表現されるその価値は、商品 B の価値が同じでも商品 A の価値の増大または減少に正比例して増大または減少する。

II. 亜麻布の価値は不変のまま、上着価値が変化する場合。同じ条件下で、上着の生産に必要な労働

¹⁸ 商品について言えることは、一定の性質については、人間にも妥当する。この世に出て来るとき人は鏡を携えてはいないしフヒテ派の哲学者として登場するのもない。すなわち我は我なりとは、初め人は別人に映った人だということである。最初は彼と同じものである人間 Paul との関係を通して、Peter という人間は人間である自分に関係する。それとともに Paul は完全に、すなわち彼の肉体に包まれた状態で、人類の現象形態として通用するのである。

¹⁹ 「価値」という表現はここでは、事のついでとして以前いろいろなところで見てきたように、量的に限定された価値、すなわち価値量を指して使われている。

時間が2倍になる、例えば羊毛の刈り取りに不都合が生じてそうなるならば、20 エルの亜麻布=1着の上着ではなく、いまや:20 エルの亜麻布=1/2 着の上着 となる。逆に上着の価値が半分だけ減少すると、20 エルの亜麻布=2着の上着となる。したがって商品 A の価値が同じままで、その商品 B で表現される相対的な価値は、商品 B の価値変動に反比例して減少しあるいは増大する。

これら二つの異なる場合を比較してみると、同じだけの相対的価値の量的変化が正反対の原因から生じ得ることが明らかとなる。すなわち 20 エルの亜麻布=1着の上着から:1. 20 エルの亜麻布=2着の上着となるのは、亜麻布の価値が2倍になるか、もしくは上着の価値が半分だけ減少するからであり、2. 20 エルの亜麻布=1/2 着の上着となるのは、亜麻布の価値が半分だけ減少するから、あるいは上着の価値が2倍に増大するからである。

III. 亜麻布と上着の生産に必要な労働量が同時に、同じ方向及び割合で変化する場合があり得る。この場合 20 エルの亜麻布=1着の上着の関係に変化はない。たとえそれらの諸価値が変化しているとしてもそうである。それらの価値変化は、<69>それらが価値の変化しない第三の商品と比較されるならすぐに明らかとなる。全ての商品の諸価値が増大または減少しても、同じ割合で変化するなら、それらの相対的価値は同じままに止まるであろう。一般的には同じ労働時間で以前よりもヨリ大きいあるいはヨリ小さい量の商品が産出されるということによって、全て商品の現実の価値変化が観察される。

IV. 亜麻布と上着の生産に必要な労働量、それぞれが同時に同じ方向に変化するが、その割合が違う場合、あるいは変化の方向が異なる場合等々があり得る。このような全ての可能な組合せが一商品の相対的価値に及ぼす影響は、簡単にいえば、I、II、IIIの場合の応用により与えられる。

つまり価値量の現実の変化は明確にも徹底的にもその相対的表現、あるいは相対的価値の大きさには反映されないのである。一商品の相対的価値はその価値が同じままであっても変化しうる。その相対的価値はその価値が変動しても同じままであり得る。そして最後に、けっしてその価値量と同じ価値量の相対的表現の同時的变化が生ずる必要はないのである²⁰。

3. Die Äquivalentform

等価形態

²⁰ 第2版への注。価値量とその相対的表現とのこの不一致は、例えば次のようなじみの群集感覚をもつ俗流経済学によって表現されている:「A が減少するのは、たとえその際に多くの労働が A に支出されても、それをもって(A が)表現される B が増大するからだとするなら、諸君の一般的な価値原理は地に落ちる...。商品 A の価値が相対的に B に対して増大するから、商品 B の価値が相対的に A に対して減少するのだ、ということを知るなら、リカードオがその重要な基礎とした、一商品の価値は常にそれに肉体化された労働の量によって規定されるという命題が宙に浮くことになる;なぜなら、A の諸費用の変化が、B の生産に必要とされる労働量に何らの変化がないにもかかわらず、それが交換される際の B に対する A の価値比率を変えるだけでなく A に対する B の価値比率をも変えるのだとすれば、一つの物品に支出される労働量はその価値を規制するということを保証する教義だけでなく、一つの物品の生産費用がその価値を規制するという教義をも地に落ちることになるからである。(J. Broadhurst, „Political Economy“, London 1842, p. 11, 14.)

Broadhurst 氏は次のようにも言えたであろう:10/20、10/50、10/100 などの分数を取りあげてみよう。10 という数は不変であるが、その比例量、すなわち 10 の 20、50、100 という分母に対する相対的な大きさは絶えず減少する。つまり 10 のような整数の大きさはそれに含まれている1という数によって「規定」されるという大原則が地に落ちるのである。

<70>すでに見たように、一商品 A(亜麻布)はその価値を違う種類の一商品 B(上着)の使用価値で表わすことによって、前者は後者そのものに価値物という一つの独自の価値形態すなわち等価物の形態を刻印する。上着はその物体形態とは違う価値形態を纏うことなしに、亜麻布と等しいものとして通用する。そのことによって亜麻布商品がそれ自身の価値実在を現わすのである。実に亜麻布はそれ自身の価値実在を、上着は直接に自分と交換可能であるとすることによって、表現するのである。したがって一つの商品の等価形態はそれが直接他の商品と交換可能であるという形態なのである。

一つの商品種類、例えば上着が他の一つの商品種類、例えば亜麻布に対し等価物として用いられるとき、上着は特有の性質、すなわち亜麻布と直接交換可能な形態と見なされるという性質を受け取るが、それによって上着と亜麻布との交換割合が与えられるということは断じてない。亜麻布の価値量が与えられているなら、この割合は、上着の価値量に依存する。上着が等価物で亜麻布が相対的価値として表現されるのであっても、逆に亜麻布が等価物で上着が相対的価値として表現されるのであっても、上着の価値量が生産に必要な労働時間によって規定されることに変わりはないのであり、その価値形態からは独立に上着の価値量は規定されるのである。だが、商品種類上着がこの価値表現において等価物の地位に立つや否や、商品種類上着の価値量は価値量としては表現されなくなる。商品種類上着はその価値等式のなかではむしろただ一つの物の一定量として機能するだけである。

例えば 40 エルの亜麻布は「値する」一何に？ 2 着の上着に。商品種類上着はここでは等価物の役を演ずるのだから、すなわち使用価値上着は亜麻布に対しては商品体として有効なのであるから、一定の価値量を亜麻布が表現するには、一定量の上着で十分なのである。したがって2着の上着が 40 エルの亜麻布の価値量を表現することは可能であるが、けっしてそれら自身の価値量、上着の価値量を表現することはできないのである。この事実の上っ面だけを見て、すなわち価値等式のなかにある等価物は常に一つの Sache 物の単純な量の形態、一つの使用価値の形態をとることだけを見て、Baily はその先行者や後続者たちと同様に、価値表現には一つの量的な関係だけを見るべきだと唆してきたのである。むしろ一つの商品の等価形態はいかなる量的な価値規定をも含んではいないのである。

等価形態を考察するとき第一に目につくのは、使用価値がその反対物、すなわち価値の現象形態になっているという等価形態の特性である。

<71>商品の自然形態が価値形態になるのである。しかし注意せよ！ 商品 B(上着、小麦、もしくは鉄など)にとってこの取り替えが生ずるのは、ただ商品 B に一つの任意の他の商品 A(亜麻布など)が向かい合う価値関係のなか、この関係のなかでだけのことなのである。いかなる商品も自分自身に対して等価物として関係することはできない、すなわち自然物としてのそれ自身の外皮がその価値を表現することはできないのだから、商品は等価物である別な商品と関係しなければならない、あるいは他の商品が自然物としてもつ外皮をそれ自身の価値形態としなければならないのである。

このことは諸商品体に諸商品体としてすなわち諸使用価値として向き合う一つの物差しの例をわれわれに示している。一個の円錐状の砂糖片は物体であるから、重さがあり重量をもつのだが、どんな砂糖片の重

量もその物体を見ても知ることはできず、それを手で触って感じ取ることもできない。砂糖片の物体形態が重さの現象形態ではないのと同様、鉄という物体形態それ自体も重さの現象形態ではない。だが、われわれは砂糖片を重さとして表現するために砂糖片を鉄との重量関係に置くのである。この関係において鉄は、重さだけを表わす物体として認められている。したがって鉄量は砂糖の重さの物差しとして役立ち、砂糖体に対しては単なる重さの像(かたち)を表わすのである。鉄がこの役割を演ずるのはただ、この関係——鉄に砂糖あるいはその重さが知られるべき何らかの他の物体が向かい合っている——のなかだけのことなのである。これら二つに重さがなければ、それらはこの関係に立つこともできないし、したがって一方が他方の重さの表現として役立つこともできない。両方を天物差し皿に置けば、実際、重さとしては両者は同じであり、したがって重さという同じのものが一定の比率において存在することがわかる。重さの物差しである鉄の身体が砂糖片に対して重さを代表するように、われわれの価値表現において上着の身体は亜麻布に対して価値を代表するのである。

だが、類似はここまでである。鉄は、砂糖片の重量表現においては、両者に共通の自然属性、すなわちその重量を代表する。だが亜麻布の価値表現において上着が代表するのは、両者に共通な超自然的な属性:それらの価値という純粋に社会的な何かである。

一商品例えば亜麻布の相対的な価値形態は亜麻布の価値実在を、その身体とも、またその諸自然属性とも全く異なるもの、例えば上着に等しいものとして表現する。そのことによってこの価値表現自体が、それに社会的な関係が隠されていることを示唆している。等価形態の場合はその逆である。等価形態の本質は、本来、将に一つの商品体である上着が、あるがままの姿で価値を表わすということ、すなわち物的属性として価値形態を備えているということにある。もちろんそう言えるのは、亜麻布商品が等価物・上着商品に関する価値関係のなかだけのことである²¹。Da aber Eigenschaften eines Dings nicht aus seinem Verhältnis zu andern Dingen entspringen, sich vielmehr in solchem Verhältnis nur betätigen, scheint auch der Rock seine Äquivalentform, seine Eigenschaft unmittelbarer Austauschbarkeit, ebenso sehr von Natur zu besitzen wie seine Eigenschaft, schwer zu sein oder warm zu halten. ある物の諸属性は他の諸物とその物がもつ関係から生ずるのではなく、むしろそのような関係において作用するものである(と考える——訳者)から、<72>上着は重さや暖かさというその自然属性と同様にその等価形態、直接的交換可能性という属性をもつかのように見えるのである。だからこの形態が最終的に貨幣という完成した姿で彼の前に現われる段になるやすぐに、等価形態の謎が初めて政治経済学者のブルジョワ的で粗雑な眼に飛び込んでくる。そこで金と銀の神秘的な性格を分析しようと、彼は金銀をさほど眩しくない諸商品のあいだに紛れ込ませ、そして絶えず新しい喜びを感じながら、その時々等に等価物商品の役割を演じてきた商品賤民たちの名を次々と述べ立てるのである。すでに 20 エルの亜麻布 = 1 着の上着のような最も単純な価値形態が等価形態の謎を解くために与えられているのを彼が予感することはないのである。

等価物として役立つ商品の身体は常に **Verkörperung abstrakt menschlicher Arbeit** 身体化された抽象的な人間労働として通用し、また常に一定の有用で具体的な労働の生産物である。したがってこの具体的な労働が

²¹ 等価物とはそもそもこのような **Reflexionsbestimmungen** 反射する方向が定まっている一つの物である。この人が例えば王であるのは、将にこの男に対して他の人々が臣下として振る舞うからなのである。人々は、逆に、彼が王であるが故に(自らは——訳者)臣下であると思うのである。

抽象的人間労働の表現になるのである。例えば上着が抽象的人間労働の実現と認められるなら、裁縫も、実際それには抽象的人間労働が実現されているのであるから、単なる抽象的な人間労働の実現形態として通用する。亜麻布の価値表現において裁縫の有用性は、裁縫が服をしたがって衣装をつくることにはなく、それがひとつの Körper 物体——人はそれを眺めて、それが価値であり、したがって亜麻布価値に対象化されているものと全く異なるところがない労働のセリーであるのを知る——をつくることにある。そのような価値鏡をつくるためには裁縫そのものは人間労働であるという抽象的な本質以外の何物をも映し出してはならないのである。

織布という形態でと同様に裁縫という形態でも、人間の労働が支出されるのである。したがって両方の労働とも人間労働という **allgemeine Eigenschaft** 一般的な属性を有するのであり、だから一定の場合、例えば商品生産がおこなわれている場合には、この観点からのみ考察することができるのである。そのことに不可解なところは何もない。だが商品の価値表現のなかでは事実が歪曲される。例えば、織布は織布というその<73>具体的な形態においてではなく、人間労働というその一般的な属性において亜麻布を作るのだということを表わすために、亜麻布の等価物をつくる裁縫という具体的な労働が、抽象的な人間労働の手に掴める現実化された形態として、織布に対して対置されるのである。

つまり等価形態の第二の特性は、具体的労働がその反対物、すなわち抽象的人間労働になるということにある。

この具体的な有用労働、裁縫は単に無差別な人間労働の表現として認められることによって、他の労働すなわち亜麻布に注ぎ込まれた労働との同一性の形態を獲得し、そしてそれゆえ裁縫は他の諸労働と同様に私的労働、すなわち商品を生産する労働であるにもかかわらず、直接に社会的な形態にある労働なのである。だから裁縫は他の商品と直接に交換可能な一つの生産物で自らを表すのである。だから私的労働がその反対物の形態、すなわち直接に社会的な形態にある労働になるというのが、等価形態の第三の特徴なのである。

最後に展開された等価形態の二つの特徴は、他の多くの **Denkenformen** 諸思惟形態、諸社会形態、及び諸自然形態を最初に分析した偉大な学者までわれわれが遡るとき理解可能になる。それは **Aristoteles** である。

Aristoteles は第一に、

商品の貨幣形態は将に単純な価値形態の、すなわち何らかの他の任意の商品による一つの商品の価値表現のヨリ発展した姿であると述べている。その理由は、彼に依れば次のとおりである：

「5個のクッション＝1軒の家」は

「5個のクッション＝しかじかの貨幣」

と「異なる」。

彼はさらに価値関係——そのなかに価値表現が隠れている——ではそれはそれで、クッションに対して家が質的に等置されていること、またそのような同一の性質をもつことなしに感覚的に異なるこれら諸物が比較可能な諸量として相互に関係することはないということを理解していた。「交換は」、彼が云うには、「同等性なしには存在し得ず、<74>比較可能性(＝同一の基準での計量可能性——訳者)を欠く同等性も存在し得な

い」のである。ここで彼は止め、価値形態についてそれ以上に分析することを放棄する。「それほどまでに種類の異なる諸物が比較可能である」、すなわち質的に同じであることは、「実際にはあり得ない」のである。この等置は将に互いによそよそしい諸物がもつ何か真の本質の等置、すなわち「実際の必要のための急場しのぎ」であり得る^[24]。

Aristoteles は、彼の分析が頓挫するときに自らわれわれに語る、すなわち価値概念の欠落について語るのである。クッションの価値表現において家がクッションのために表現する等しいものすなわち社会的実体とは何か？ **Aristoteles** は、諸物の真の本質である何物かは「実は存在し得ない」というのである。何故か？ クッションに対して家は、クッションと家の両方にそれが存在する同じものを現実に表示しているかぎり、一つの同じものを表わしている。そしてそれは——人間の労働である。

全ての労働は諸商品価値という形態においては同じ人間の労働として存在し、それゆえ同じ効力をもつものとして表現される、このことを価値形態そのものから **Aristoteles** は読みとることはできない。それはギリシャ社会が奴隷労働に基づき、したがってそこで人間たちは不平等であり彼らの諸労働力の自然的基礎に対する作用度も等しくなかったからである。価値表現の秘密、すなわち全ての労働の平等とその同等な有効性の秘密は、人間の平等性の概念がすでに人々の先入観として確実なものとなるや直ちに、全ての労働が人間労働一般であることを理由として、またその場合に限って、解読可能となるのである。そのことは、商品形態が労働生産物の一般的な形態であり、したがって人間相互の商品所有者としての関係が支配的な社会関係である社会において初めて可能になる。**Aristoteles** の天才の輝きは将に彼が諸商品の価値表現のなかに同じものの関係を見出したということにある。彼が生きたのが歴史的に限定されたある時期の社会でしかなかったということが、同じものの関係がでは「本当に」はどこに存在するのかを彼が発見するのを妨げたのである。

4. Das Ganze der einfachen Wertform

単純な価値形態という全体

一商品の単純な価値形態はその商品の別な種類の一商品との価値関係または交換関係のなかに含まれている。商品 A の価値は、質的には、商品 B が商品 A と直接的に交換可能であることによって表現される。商品 A の価値は、量的には、一定量の商品 B が一定量の商品 A と交換可能であることによって表現される。言い換えると、<75> 一商品の価値はその「交換価値」という表現によってこそ独立に表現されるのである。この章の冒頭では慣習に沿って「商品は使用価値であり、そして交換価値である」と言われたのだが、厳密に言うとそれは偽りであった。商品は使用価値または使用対象であり、そして「価値」である。商品があるがままにこういう二重のものとして現れるのは次の場合だけである。すなわち、その価値が一つの独自の、その自然形態とは違う交換価値という現象形態を得る場合であり、そして商品が孤立的にではなく常に第二の別な種類の一商品との価値関係または交換関係のなかで考察され、交換価値という形態を得る場合だけである。だが交換価値という言い回しは無害で、簡略化に役立っている。そのことがいつかは理解されるだろう。

商品の価値形態または価値表現は商品価値の本質から生ずるのであって、その逆に価値と価値量が交

換価値というそれらの表現様式から生ずるのではない。そのことをわれわれの分析は証明した。だが、重商主義者たちや重商主義を今の時代に蒸し返している **Ferrier** や **Ganilh** 等、またそれに反対する者たち、すなわち **Bastia** やその一味など自由貿易主義の商社外交員の輩どもが同様に抱いているのがこの妄想——価値と価値量とは交換価値という表現様式から生ずる——なのである²²。重商主義者たちはその重心を価値表現の質的な側面に、したがって等価形態にある商品——最終的に貨幣という **Gestalt** 像(かたち)を獲得する——に置くのである。それに対して現代の自由貿易主義の商人たちは、彼らの商品のそれぞれの価格が関わる相対的価値形態の量的側面を重視しなければならない。それ故彼らにとっては、商品の価値も価値量も交換関係を介してでなければ表現されないもの、したがって実際の価格リストを載せた紙切れのなかにだけ存在するのである。スコットランド人である **Macleod** は、ロンバート・ストリートについての混乱した考えを可能な限り学術的に飾り立てるといふ仕事で、迷信的な重商主義者たちと啓蒙された自由貿易主義者たちを見事に総合している。

商品 **B** に対する価値関係に含まれる商品 **A** の価値表現を詳細に検討することによって、この価値関係のなかで商品 **A** の自然形態はただ使用価値の姿として、商品 **B** の自然形態はただ価値形態または価値姿態として有効なのだということは既に明らかである。商品に包み込まれた使用価値と価値との内的な対立が一つの外的な対立によって、すなわち二商品の関係——そのなかで<76>その価値が表現されるべき一商品はただの使用価値として通用し、逆に価値がその身体で表現される別な商品は直接に交換価値として通用する——によって表現されるようになるのである。したがって一商品の単純な価値形態はその内に含まれている使用価値と価値との対立の単純な現象形態なのである。

労働生産物は、それがいかなる社会的状態においても使用対象であるが、将に歴史的に規定された(人間社会の——訳者)発展の一時代——使用対象の生産に支出される労働をその「対象の」本質すなわち使用対象自身の価値として表現する——が労働生産物を商品に変えるのである。したがって、商品の単純な価値形態は同時に労働生産物の単純な商品形態であり、また、商品形態の発展は価値形態の発展と一致するのである。

単純な価値形態、この萌芽形態——一連のメタモルフォゼによって価格形態にまで成熟する——の未熟さは、一瞥しただけで明らかである。

何らかの商品 **B** での表現は、商品 **A** の価値をそれ自身の使用価値から区別するだけであり、したがって商品 **A** をそれ自身とは異なる種類の何らかの個別的商品との交換関係のなかに置くだけであって、この表現が商品 **A** の全ての他の商品との質的な同等性と量的な割合を表わしているのではない。一商品の単純な相対的価値形態は一つの他の商品の個別な等価形態に対応している。同様に上着は、亜麻布の相対的価値表現のなかで、等価形態すなわちこの個別的商品種類・亜麻布に対する直接的な交換可能性の形態を獲得する。

その一方で、個別な価値形態は自ずと一つのより完全な形態に移行する。そのことに媒介されて、一商品 **A** の価値も確かに別な種類の一商品で表現されるようになる。この第二の商品がいかなる種類のものにな

²² 第二版への注。F. L.A. Ferrier (関税制度の監督官), „Du Gouvernement considéré dans ses rapports avec le commerce“, Paris 1805, und Charles Ganilh, „Des Systèmes d'Économie Politique“, 2ème éd., Paris 1821.

るかは、すなわち上着、鉄、それとも小麦等々になるかは全くどうでもよいことである。一商品があればやこれやの別な商品種類に対する価値関係に立つのに応じて、一つの同じ商品のさまざまな単純な価値表現が生ずる^{22a}。一商品に可能な価値表現の数を制限するものはただそれ自身とは異なる商品種類の数だけである。したがって一商品の個別的な価値表現はたえずその列を長くするそのさまざまな単純な価値表現に転化する。

B) Totale oder entfaltete Wertform

全体的なまたは発展した価値形態

<77> Z Ware A = u Ware B oder = v Ware C oder = w Ware D oder = x Ware E oder = etc.

(20 エルの亜麻布=1着の上着 または=10 ポンドの茶 または=40 ポンドのコーヒー または=1 クォーターの小麦 または=2オンスの金 または=1/2トンの鉄 または=etc.)

1. Die entfaltete relative Wertform

展開された相対的価値形態*

* この相対的価値形態は単純な価値形態から演繹された価値形態ではない。商品の本質(価値を運ぶ使用価値)の直接的な結果である一商品と全ての他種類の諸商品との交換関係のなかに現れる価値形態である。——訳者。

一商品例えば亜麻布の価値は、今や、商品世界を構成する他の無数の **Elemente** (自律的な) 諸要因で表現されている。他の商品体のいずれもが亜麻布価値を映す鏡になる²³。この価値そのものが実に初めて差異のない人間労働のゼリーとして表れる。というのは亜麻布価値をつくる労働は、それがどのような自然形態をもっていようと、またそれが上着、小麦、あるいは鉄などに加えられていようと、明示的に他の人間の労働と同等だと認知されているからである。その価値形態によって亜麻布は社会的関係に立つのであるが、この関係は単に他の個々の商品種類との社会的関係ではなく、商品世界との社会的関係である。商品である亜麻布はこの世界の **Bürger** 市民である。同時に、市民の価値の諸表現——すなわち商品価値は、それが表れる使用価値の特殊な形態に無頓着であることを示す諸表現——が無限に続く列をなして存在する。

^{22a} 第二版への注。例えば **Homer** の時代には一つの物の価値は列をなす様々な諸物で表現される。

²³ だから、亜麻布の価値を諸上着で表すとき、人は亜麻布の上着価値のことを、また亜麻布の価値を穀物で表すときには亜麻布の穀物価値のことを言っているのである。そのような表現の各々が物語っているのは、上着、穀物などの使用価値で現れているものは亜麻布の価値だ、ということである。「各商品の価値というものが、商品相互の関係を交換で示すから、われわれは各々の商品の価値を・・・穀物価値、布価値として、というようにそれぞれの商品に応じて、その商品が比較される商品をもって示すことができるのである；そしてそれゆえに、存在する商品の数だけ無数の様々な諸価値が存在するのであり、さらに全ては現実的にもまた名目的にも等しいのである。」("A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value; chiefly in reference to the writings of Mr. Ricardo and his followers. By the Author of Essays on the Formation etc. of Opinions", London 1825, p. 39.) 匿名の作品の編者である S. Baily はイングランドで世間を騒がせたのだが、彼らの時代には、同じ商品価値の乱雑な相対的諸表現に関するこの指摘によって、価値の全ての概念規定が否定されなければならなかった。それはそうと、その偏狭さにもかかわらず **Baily** がリカードの理論の致命的欠点を入念に調べていたことは、例えば **Westminster Review** において彼を攻撃したリカード学派的苛立ちを証明するものである。

<78>第一の形態：20 エルの亜麻布 = 1着の上着 においては、これら二つの商品がある一定の量的な比率で交換可能だということは偶然の事実であり得る。第二の形態ではそれとは逆に、偶然の現象とは本質的に区別されるその現象を規定する背景がすぐに透けて見えてくる。亜麻布の価値は、様々なことこの上ない持ち主たちに帰属する無数の他種類の諸商品——上着、コーヒーあるいは鉄等——で表現されようとも、同じ大きさのままである。個別的な商品の持ち主のあいだの偶然的な関係は次々に解消される。交換が商品の価値量をではなく逆に商品の価値量がその交換関係を規制するのである。

2. Die besondere Äquivalentform

特殊な等価形態

亜麻布の価値表現において、それぞれの商品すなわち茶、小麦、鉄などは、等価物、したがって価値の身体として認知されている。これらの商品それぞれの特定の自然形態は、今では他の多くの商品とともに一つの特殊な等価形態になっている。同様に、様々な内容の具体的な有用労働を含む多様な商品の身体が、今では単なる人間労働の多数の実現形態または現象形態として認知されている。

3. Mängel der totalen oder entfalteten Wertform

展開された価値形態の欠陥

第一に、商品の相対的価値表現には終わりが無い。というのは価値表現の列はけっして完結しないからである。価値等式と価値等式とを繋いでいる鎖は、新たな価値表現の材料となるそれぞれの商品種類が登場するごとに絶えず延長される。第二に、その鎖は、異なる種類の諸価値表現が互いに重なり合っている一つの雑然としたモザイクをつくりだしている。最後に、それぞれの商品の相対的価値が、この展開された形態で表現されるようになるのは必然的である。同様に、それぞれの商品の相対的価値形態は、他の各商品の相対的価値形態とは異なる終わりのない価値表現の列で構成されるのも必然的である。- 展開された相対的価値形態の混沌は、それらに対応する等価形態に反映する。個々の商品種類がもつ各々の自然形態は、ここでは、無数の他の特殊な等価形態とともに一つの特殊な等価形態なのであるから、一般的に存在するのは制限された諸等価形態だけであり、それら等価形態の一つひとつは他の等価形態を排除する。同様に、各々の特殊な等価物商品が含む特定の内容をもつ具体的な種類の有用労働は、人間労働のただ<79>特殊な、したがって尽きることのない現象形態なのである。人間労働は確かに上述の特殊な諸現象形態の全てという完全なあるいは全体的な現象形態をもっている。が、人間労働はなんらの統一的現象形態ももっていない。

ともあれ展開された相対的価値形態は次のような単純な諸価値表現からなる一つの全体から、あるいは第一の形態の諸等式から構成されている：

20 エルの亜麻布 = 1着の上着

20 エルの亜麻布 = 10Pfd.の茶など

だが、これらの等式の各々には次の逆の同じ関係の等式が内在している。

$$\begin{aligned} 1 \text{ 着の上着} &= 20 \text{ エルの亜麻布} \\ 10\text{Pfd.の茶} &= 20 \text{ エルの亜麻布など} \end{aligned}$$

現実是这样である：ある人が自分の亜麻布を多数の他種類の商品と引き換えに譲渡し、したがって亜麻布の価値を一連の他の諸商品で表すとき、他の多数の商品の持ち主は必然的に自分の諸商品を亜麻布と引き換えに譲渡するはずであり、したがって彼らのもつ様々な諸商品の諸価値が同じ第三の商品、すなわち亜麻布で表現されるはずである。一連の価値等式：20 エルの亜麻布 あるいは=1着の上着 あるいは=10Pfd.の茶 あるいは=等々 をひっくり返すなら、事実上すでにこの等式列が含んでいる逆の等式の列、すなわち：

C) Allgemeine Wertform

一般的価値形態

$$\begin{aligned} 1 \text{ 着の上着} &= \\ 10\text{Pfd.の茶} &= \\ 40\text{Pfd.のコーヒー} &= \\ 1\text{Qtr.の小麦} &= \\ 2 \text{ Unz.の金} &= \quad \} \quad 20 \text{ エルの亜麻布} \\ 1/2 \text{ トンの鉄} &= \\ x \text{ 量の商品 A} &= \\ \text{等々の商品} &= \end{aligned}$$

1. Veränderter Charakter der Wertform

価値形態の性格の変化

今では諸商品はそれらの価値を、1.単純に、というのは唯一の商品で、2. 統一的に、というのは同じ商品で表している。諸商品の価値形態は単純かつ共通、したがって一般的である。

<80> 形態 I と形態 II は、一商品の価値をそれ自身の使用価値あるいはその商品体とは異なるものとして表現するだけであった。

第一の形態が示したのは次の価値等式である：1着の上着=20 エルの亜麻布, 10Pfd.の茶=1/2 トンの鉄など。上着価値は亜麻布と同じものとして、10Pfd.の茶の価値は鉄と同じものとして等々、と表現される。だが、亜麻布と同じものと鉄と同じものという上着と茶の価値表現は、亜麻布と鉄とが異なっているように異なっている。これらの形態が世の初め——偶然に、また時々おこなわれる交換によって諸労働生産物が商品になる——から実際に存在したのは明らかである。

第二の形態は第一の形態よりも完全に一商品の価値をそれ自身の使用価値から区別する。なぜなら

例えば上着価値は今ではありとあらゆる姿の自然形態と、すなわち亜麻布と同じもの、鉄と同じもの、茶と同じもの等々、上着を除く他の諸々と同じものと向き合っているからである。他方諸商品に共通の価値形態はここでは直接に排除されている。一商品の価値表現のなかに、今では全ての他の商品が諸等価物の形態で表れているからである。一つの労働生産物、例えば家畜がもはや例外的にではなく、慣習的に様々な他の諸商品と交換されるようになればすぐに、展開された価値形態が初めて現実に表れる。

新たに獲得された形態は、商品世界の諸価値を、そこから排除された一つの同じ商品種類、例えば亜麻布で表現する。そしてあらゆる商品の諸価値をそれらと亜麻布との同一性によって表現する。亜麻布と同じものである諸価値は、今では、それ自身の使用価値から区別されるだけでなく、すべての使用価値から区別され、そのことによって亜麻布とあらゆる商品とに共通するものとして表現される。したがってこの形態は、初めて実際に、諸商品相互を諸価値として関わらせる、あるいは諸商品を互いに諸交換価値として現象させるのである。

前の二つの形態は一商品の価値を、唯一の他種類の商品によってであれ、それとは違う多数の商品の列によってであれ、表現する。いずれの場合にも、一つの価値形態が与えられることは、いわば諸商品個々の私事であり、商品は他の諸商品の助力なしに事を成し遂げる。これらの商品は互いに等価物という単に受動的な役割を果たす。それに対して一般的価値形態は商品世界の共同の仕事として発生する。商品が一般的な価値表現を獲得するのは、全ての他の商品が同時にそれらの価値を同じ等価物で表現し、新たに登場する商品種類の各々もそれらの真似をしななければならないからである。そのこととともに、商品の価値対象性はこの物がもつ単なる“社会的定在(=現実の存在におけるこの物の社会性=訳者)”であり、<81>その全面的な社会的関係を通してだけ表現され得るのであるから、価値対象性の形態も社会的に認められるものでなければならないのだ、ということが明らかになる。

今や全ての商品が亜麻布と同じものという形態を纏い、質的に等しいものすなわち諸価値一般としてだけでなく、同時に量的にも比較可能な諸価値量として表れている。全ての商品がそれらの価値量を一つの、そして同じ素材すなわち亜麻布に映し出すのであるから、それらの諸価値量が互いに映し出されることになる。例えば、10Pfd.の茶=20エルの亜麻布であり、そして40Pfd.のコーヒー=20エルの亜麻布である。したがって、10Pfd.の茶=40Pfd.のコーヒーである。あるいは1Pfd.のコーヒーのなかに隠れている価値実体である労働は同じ1Pfd.の茶に隠れている価値実体の1/4にすぎないのである。

商品世界の一般的な相対的価値形態は、商品世界から排除された等価物商品、亜麻布に一般的等価物の印を刻み付ける。亜麻布独自の自然形態はこの世界共同の価値の像(かたち)になり、したがって亜麻布は全ての他の商品と直接に交換可能になる。亜麻布の身体形態が、全ての人間労働の可視的な化身・社会的一般的な蛹(さなぎ)として通用する。織布、亜麻布を生産するこの私的労働が同時に一般的に社会的な形態、すなわち全ての他の労働との同等性を体現する形態に就く。一般的価値形態を構成する無数の等式は、亜麻布に実現されている労働を次々他の商品に含まれる労働の各々に等置し、そうすることで織布を人間労働一般の一般的現象形態とする。商品価値として対象的に表れる労働は、消極的に、すなわちあらゆる具体的な諸形態と有用な諸性質が捨象された現実の労働として表現されるだけではない。それ自身の積極的な

Natur 本質もはっきりと現れてくる。商品価値として対象的に表れる諸労働は、人間労働という共通な性格、すなわち人間の労働能力の支出に還元された現実の労働である。

一般的な価値形態、すなわち諸労働生産物を差異のない人間労働のゼリーとして表すこの形態は、独自の諸原因によって、この形態が商品世界を社会的に表現する物であることを示す。労働の一般的に人間的な性格が、この世界では、特殊な社会的性格をかたちづくっていることを一般的な価値形態は明らかにしているのである。

2. Entwicklungsverhältnis von relative Wertform und Äquivalentform

相対的価値形態と等価形態の発展関係

等価形態の発展段階は相対的価値形態の発展段階に対応する。が、等価形態の発展は相対的価値形態の発展の単なる結果にすぎないことを銘記すべきである。

<82>一商品の単純なあるいは個別的な相対的価値形態は一つの他の商品を **einzelne Äquivalent** 個別的な等価物にする。相対的価値の展開された形態、全ての他の商品でのこの一商品の価値表現は、それらの商品に様々な種類の特殊な等価物の印を付ける。最後に、一つの特殊な種類の商品が一般的な価値形態を獲得する。なぜなら、全ての他の商品がこの特殊な商品をそれらの統一的な、一般的な価値形態にするからである。

だが、価値形態一般が発展するそれぞれの段階で、価値形態の両極間のすなわち相対的価値形態と等価形態のあいだの対立も発展を遂げる。

すでに第一の形態—20 エルの亜麻布 = 1 着の上着—はこの対立を含んでいるが、この対立を固定化することはない。この等式が前から読まれるか後から読まれるかによって、亜麻布と上着のような二つの商品極の各々は、あるときは相対的価値形態に在り、あるときには等価形態を占める。第一の形態の段階で両極の対立を固定するのは骨が折れる。

形態 II では常に一つの商品だけがその相対的価値を全体的に展開する、あるいは一商品が展開された相対的価値形態を自ら獲得する。というのは、全ての他の商品が一商品に対して等価形態を占めるから、またその限りでのみ一商品は展開された相対的価値形態を獲得するからである。ここでは価値等式がその全体としての性格を変えることなしに、また価値等式を全体的価値形態から一般的な価値形態に変えることなしに、その両辺——20 エルの亜麻布 = 1 着の上着 = 10Pfd. の茶 = 1Qtr. の小麦等々——を逆にすることは不可能である。

最後の形態、形態 III はようやく商品世界に一般的で社会的な相対的価値形態を与える。というのも、唯一つの商品を例外として、商品世界に属する全ての商品が一般的な等価形態から排除されるから、またその限りでのみ形態 III は一般的に社会的な相対的価値形態を与えるのである。一商品、その亜麻布は、だから、他の全ての商品と直接的に交換可能であるという内容を表す形態に在る。なぜなら、全ての他の商品はその形

態にはないからであり、そしてその限りで亜麻布は直接的交換可能性の形態を獲得するのである²⁴。

<83>逆に一般的等価物として機能するこの商品は、商品世界の統一的な、したがって一般的な相対的価値形態から排除されている。この亜麻布が、すなわち一般的等価形態を占める何らかの商品が、同時に一般的な相対的価値形態に関わりをもつはずのものなら、亜麻布自身が等価物の役を果たさねばならない。すると次の等式を得ることになる: 20 エルの亜麻布 = 20 エルの亜麻布、これは価値も価値量も表現されない同義反復である。一般的等価物の相対的価値を表現するには、むしろ形態Ⅲをひっくり返さねばならない。一般的等価物は他の諸商品にも共通な相対的価値形態をもつのではなく、その価値は相対的に全ての他の商品がつくる終わりのない列で表現されるのである。こうして今では展開された価値形態または形態Ⅱが等価物商品の特殊な相対的価値形態として表れるのである。

3. Übergang aus der allgemeine Wertform zur Geldform

一般的価値形態から貨幣形態への移行

一般的価値形態は価値一般の一つの形態にすぎない。すなわちこの形態はどの商品にも付着し得る。他方では、一般的価値形態を占めるのは一つの商品だけである。というのも、この一つの商品が全ての他の商品によって排除されるからであり、またその限りでこの商品は一般的価値形態を占めるのである。そして最終的に一つの特種商品種類だけが排除される瞬間から、商品世界の統一的な相対的価値形態は客観的な固定性を獲得し、また一般的に社会的な効力を獲得する。

今や特殊な商品種類は、その自然形態のままに等価形態を社会的に成長させて、貨幣商品になる、または貨幣として機能する。商品世界において一般的等価物の役割を演ずることが、この商品の特殊な社会的機能になり、その機能はこの商品が社会的に独占するものになる。形態Ⅱにおいて亜麻布の特殊な諸等価物として機能し<84>、形態Ⅲにおいてそれらの相対的価値を共通に亜麻布で表現する諸商品のうち、この特権的地位を獲得するのはある特定の商品、金である。そこで形態Ⅲにおける亜麻布の地位に商品金を据えるなら、次の形態を得る:

24 一般的な直接的交換可能性の形態を眺めて、それが対立的な商品形態であって、磁石の一極が表す積極性と他の一極が表す消極性との関係と同様に、直接的な交換可能性もこの対立的な商品形態を離れて存在し得ないことを知る者など実際には決していない。だから、全ての商品に直接的交換可能性を刻印することは可能だなどという思いこみも生じうる。全てのカリック教徒が教皇になれるなどという思いこみが生じるように、である。商品生産のなかに究極的な人間の自由と個人の独立を見る小市民にとってみれば、この形態に結びついた困惑が高まること、すなわち諸商品の直接的な交換可能性は存在しないことが、望ましいのは当然であろう。この哲学を脚色したのがプルードンの社会主義である。それは、前に<Karl Marx, "Misère de la philosophie. Réponse à la philosophie de la misère de M. Proudhon", Paris, Bruxelles 1874, Kap. 1 (siehe Bd. 4, S. 67-124)> 指摘したように、一度もオリジナルな貢献を果たしたことがなかった。それどころかこの社会主義はプルードンよりずっと前に Gray, Bray その他によってもっと立派に展開されていた。そうであるからといって、今日においても恐慌時にこの知恵が“科学”の名を冠して蔓延することがなくなることもない。未だ嘗てプルードン主義のような流派がやたらと“科学”の名を振り回したことはなかった。

"wo Begriffe fehlen,

da stellt zur rechten Zeit ein Wort sich ein".

「概念が欠けるところでは、ちょうど良いタイミングで言葉が現れるもの」だ。

D) Geldform

貨幣形態

20 エレの亜麻布 =

1着の上着 =

10Pfd.の茶 =

40Pfd.のコーヒー = } 2Unzen Gold

1Qtr.の小麦 =

1/2トンの鉄 =

x単位の商品A =

形態Ⅰから形態Ⅱ、形態Ⅱから形態Ⅲへの移行に際しては本質的な変化が生ずる。その場合とは違って、形態Ⅳを形態Ⅲから区別するものは、今では亜麻布の代わりに金が一般的な等価形態を獲得していることだけである。形態Ⅲでは亜麻布のものであった一般的等価物の地位に在るのは、形態Ⅳでは金である。その間に前進しているのは、直接的な一般的交換可能性の形態、あるいは一般的等価形態は、今や社会の慣習によって、最終的に商品金の特殊な自然形態と一体になっているという点である。

他の諸商品に対して金は将に貨幣として向き合う。というのは、金は以前からとっくに商品としてそれらの諸商品と向かい合っていたからである。金は他の諸商品に対して平等に等価物として機能する。個々の諸交換行為において金が個別的な等価物として機能しようが、他の諸等価物商品とともに特殊な等価物として機能しようがそのことには変わりはない。金は次第に大なり小なり一定の範囲で一般的等価物として機能するようになる。商品世界におけるこの地位を独占するようになると直ちに、金は貨幣商品になる。そしてその瞬間に初めて形態Ⅳは形態Ⅲから区別される。あるいは一般的価値形態は貨幣形態に転化するのである。

商品世界におけるこの地位を独占するようになると直ちに、金は貨幣商品になる。そしてその瞬間に初めて形態Ⅳは形態Ⅲ区別される。あるいは一般的価値形態は貨幣形態に転化するのである。

一商品例えば亜麻布の、すでに貨幣商品として機能している商品、例えば金での単純な相対的価値表現が価格形態である。したがって亜麻布の「価格形態」は：

20 エレの亜麻布 = 2 Unzen の金

あるいは、2 Unzen の金鑄貨に付けられた名称が 2Pfd.St.であれば、

20 エレの亜麻布 = 2Pfd.St.

である。

<85>貨幣形態を認識する際に困難なのは、概していえば一般的な等価形態、したがって一般的価値形態、

形態Ⅲを認識するところだけである。形態Ⅲは逆転されて形態Ⅱに、すなわち展開された価値形態に解消される。そしてその形態を構成するのは形態Ⅰ：20 エルの亜麻布＝1着の上着あるいはx量の商品 A＝y量の商品 B である。つまり単純な商品形態が貨幣形態の発端なのである。

4. Der Fetischcharakter der Ware und sein Geheimnis

商品の呪物のような性格とその秘密

商品という物は、一見、分かりきったつまらない物である。が、その分析は、商品がとても厄介な物で、形而上的な小うるさい文句や神話的な気まぐれに充ちていることを教える。使用価値であるということに限って言えば、商品に神秘的なところは何もない。たとえ今私が、その諸属性によって人間の諸必要を満たすとの観点から、あるいは人間労働の生産物としてこれらの諸属性を初めて獲得するとの観点から商品进行を考察しようとも、そうである。人間がその活動により自然素材の形態を彼の必要に合わせて変える、ということは感覚的に明らかである。例えば材木は、それから机がつくられるとその形態が変えられる。にもかかわらず机が木、ありきたりの感覚的な物であることに変わりはない。だが、机はその脚と体で立っているだけない。他の諸商品と向かい合うと商品は逆立ちをし、そして気まぐれな想いを繰り返す。それは自由気ままに踊り始めるなどでもない。たとえ風変わりなものなのである²⁵。

つまり商品の謎めいた性格はその使用価値からは生じない。同様にそれは価値規定の内容からも生じない。というのは第一に、諸有用労働または諸生産行為がどれほど多様であったとしても、それらは人間という器官の諸機能であり、それら諸機能の各々は、それらの内容や形態にかかわらず、本質的に人間の頭脳、神経、筋肉、感覚器官等々の能力の *Verausgabung* 支出だからである。第二に、価値量規定の基礎にあるもの、すなわちそれぞれの支出の継続時間または労働の量は、区別可能な労働の量とは明白にちがうものだからである。どんな場合にも生活手段の生産にどれだけの労働時間が費やされるかは、<86>たとえさまざまな発展段階によって違いがあるとはいえ、人の興味を引く事柄である²⁶。最後に、人々が何らかのやり方でお互いのために働くようになるとすぐに、彼らの労働も社会的形態を纏うのである。

では労働生産物が商品の形態を纏う(まとう)やいなや直ちに現れる労働生産物の謎めいた性格はどこから生ずるのか？ 明らかにこの形態そのものからである。人間の諸労働の同等性が諸労働生産物の同じ価値対象性という物的形態を獲得し、人間労働力の支出(量)を労働の継続時間という尺度が諸労働生産物の諸価値量という形態を獲得し、最後に生産者たちの諸関係——そのなかで彼らの諸労働の社会的諸内容が作動

²⁵ 世界が静まっているように見えるとき、それを元気づけようと中国と机だけが踊り出すということが思い出される。

²⁶ 第二版への注。昔のドイツで1日の労働から1モルゲン²⁷の土地が算出され、したがって1モルゲンが *Tag(e)werk* 1日分の仕事から算出された(1労働日と呼ばれた。同様に *jurnale oder jurnalis, terra jurnalis, jornalis oder diurnalis*)、*Mannwerk* 1人分の仕事、*Mannskraft, Mannsmaad, Mannshauet* 等々と呼ばれた。Georg Ludwig von Maurer, "Einleitung zur Geschichte der Mark-, Hof-, usw. Verfassung", München 1854, p. 129 sq.)。

させられる——が諸労働生産物の社会的関係という形態を獲得するのである。

つまり商品形態の謎めいた性格とは偏に(ひとえに)次のことを指すのである。すなわち商品形態は彼ら自身の労働の社会的性格を諸労働生産物自身もつ対象的な諸性格すなわちこれら諸物の社会的な諸自然属性として人の眼に映し出し、したがって生産者たちの社会の総労働との社会的関係を彼の外に存在する諸対象の社会的関係として映し出す。この **Quidproquo** 置き換えによって諸労働生産物は諸商品すなわち感性的には超感覚的または社会的な諸物になる。同様に **der Lichteindruck eines Dinges auf den Sehnerv** 視神経上に写るある物の像は、視神経自身が受ける主観的刺激としてではなく、眼の外に存在するある物の **gegenständliche** 対象的な姿として表れる。だが物が見えるときには実際に、ある物すなわち外部の対象から別な物すなわち眼に光が投射されている。これは物理的な諸物のあいだの物理的な関係である。反対に商品形態とそれが表れる諸労働生産物の価値関係は、それらの物理的な性質及びそれから生ずる物的な諸関係とはいかなる関連も持たない。ここで人々に対して諸物の関係という幻想的な形態で現れるのは、将に人々自身の特定の社会的な関係である。だから類似したものを見出すためにわれわれは宗教の世界という身近な隣接する領域に逃げ出さなければならない。そこでは人間の頭の諸生産物が独自の命を与えられて、相互にまた人々とのあいだにいつでも存在する独立の姿で現れる。商品世界の人の手による諸生産物についても同様のことが言える。<87>私が **Fetischismus** 呪物崇拜と呼ぶのがこれである。それは諸労働生産物が商品として生産されるや忽ちのうちに諸労働生産物に取り憑き、そして商品生産からは切り離せないものである。

商品世界のこの呪物的性格は、以前に行われた分析が示すように、商品を生産する労働に独自の社会的性格から生ずる。

諸使用対象が商品になるのは、それらが互いに独立に営まれる私的な諸労働の生産物であるからである。これら私的諸労働の複合体が社会的総労働である。私的生産者たちは彼らの諸労働生産物の交換を媒介に初めて接触するのであるから、彼らの私的な諸労働の特殊な社会的性格もこの交換のなかで初めて表れる。あるいは私的諸労働は、実際、交換によって諸労働生産物が、またそれらを介して諸生産者が置かれる諸関係のなかで初めて社会的総労働の分枝として作用するのである。生産者たちの眼には、彼らの私的な諸労働の社会的な諸関係はあるがままに、すなわちその諸労働において人々がもつ直接的に社会的な諸関係としてではなく、むしろ人々の物的な諸関係及び諸物の社会的な諸関係として映るのである。

それらの交換のなかで初めて、諸労働生産物はそれらと感性的に異なっている使用対象としての性質とは別の、社会的に同一な価値対象性(商品の価値という対象的な性質——訳者)を獲得する。有用物と価値物への労働生産物の分裂は、将に、交換がすでに十分な広がりと重要性を獲得し、それに伴って諸有用物が交換を目的に生産され、したがって諸物の価値性格がすでにそれが生産されるときから配慮されると直ぐに **sich betätigen** 現れる。この瞬間から生産者たちの私的な諸労働は現実にある二重の社会的な性格を獲得するのである。それらの労働は一方では特定の有用な諸労働として、特定の社会的な必要を満足させねばならず、そうすることで社会的総労働の分枝、すなわち社会的な労働の分割という自然発生的な体制の分枝

であることを実証しなければならない。他方、それらの諸労働は、特殊な有用な私的労働の各々が他の有用な種類の私的労働と交換可能であり、したがってそれらと同等と認められる限りでそれら労働をおこなう諸生産者の多様な必要を満たすのである。全く異なっている諸労働の同等性は、それら諸労働の現実的な不等が捨象されることによってのみ、それらの労働が人間労働力の支出すなわち抽象的人間労働として有する共通の性格に<88>還元される場合のみ、可能である。私的生産者たちの脳には彼らの私的諸労働がもつこれら二重の社会的性格が実際の交流すなわち生産物交換で表れる諸形態の姿で反映され、彼らの私的諸労働の社会的に有用な性格は、労働生産物は有用でなければならず、しかも他人にとって有用でなければならぬという形式で反映され、異なった諸労働の同等性という社会的性格は、これら物的に異なる諸物すなわち労働生産物が共通にもつ価値性格という形式で反映されるのである。

だから、これらの諸物が彼らにとっては同じ種類の人間労働を被う単なる物的な表皮として有効であるということから、人々はそれらの労働生産物を諸価値として相互に関係させるのではないのである。逆である。彼らは交換において彼らの多様な諸生産物を諸価値として等置する、すなわち彼らは彼らの互いに異なる諸労働を人間労働として等置するのである。彼らはそのことを知らないが実行するのである²⁷。諸価値の額にそれらが何であるかが書かれているわけではない。価値はむしろ労働生産物の各々をある種の社会的な象形文字に変えるのである。後になって人々は象形文字の意味を剥ぎ取って彼ら自身の社会的な生産物の秘密の陰に隠す。というのは諸価値という諸使用対象の規定内容はその社会的生産物であって、その有効なことは言葉と同様である。諸労働生産物は、それらが諸価値である限りでは、それらの生産に支出された人間労働の単なる物的な諸表現であるとの後世の科学的発見は、人類の発展史において画期をなすものであるが、それによってもけって労働の社会的性格の対象的な外観が追い払われるものではない。互いに独立な私的諸労働の特殊な社会的性格の本質は人間労働としての同等性にあり、そして同性格は諸労働生産物の価値性格を纏う。商品生産をこの特殊な Produktionsform 生産形態として有効にするのはそのことである。だが、それ(労働生産物の本質とその形態)が発見された後にも相も変わらず、同じものが、商品生産の諸関係という因習を決定的なものとするのである。それはまるで空気のその諸要素への科学的分解が、空気形態を物理的な物体形態として存続させているようなものである。

<89>生産物の交換者が最初に関心に向けるのは、自身の生産物と引き換えに他人の生産物のどれだけを手に行かせるか、すなわち諸生産物が交換される比率がどうであるか、という問題である。この比率がある程度慣習的な固定性をもつまでに成熟すると直ぐに、この比率は労働生産物の性質から生じているように見え、その結果例えば 1 トンの鉄と 2 Unzen の金とが等置されることになる。1 Pfd. の金と 1 Pfd. の鉄が、それらの異なった物理的及び化学的屬性にもかかわらず、同じ重さの物として等置されるのと同じである。実際、諸労働生産物の価値性格は、それが価値の諸量として現れることによって初めて固定的になる。価値の諸量は、諸意志、交換者たちの予断や行為とは無関係に、絶えず変化する。価値の諸量自体の社会的な運動は、交

27 第二版への注。Galiani が、"Der Wert ist ein Verhältnis zwischen Personen - "La Ricchezza è una ragione tra due persone" 「価値とは人格間のある関係のことである。」というとき、彼は、"unter dinglicher Hülle verstecktes Verhältnis." 「物的な包みで覆われた関係のなかにある(人格間の・・)」と付け加えるべきだったのである。(Galiani, "Della Moneta", p. 221, t. III von Custodis Sammlung der "Scrittori Classici Italiani di Economia Politica", Parte Moderna, Milano 1803.)

換者たちには、それによって交換者たちがコントロールされる諸物の運動という形態を纏う。相互に独立に営まれながらも、全面的に相互に独立している私的な諸労働から構成されている社会的な労働分割体制の自然発生的な分枝として、絶えずそれらの社会的な均衡量に還元され続けるのだという科学的な洞察が経験から生成するには、それに先だって、十分に発展した商品生産が存在することが必要なのである。というのは、偶然的で絶えず増大するそれらの生産物の諸交換関係においては、家屋が頭に倒れかかってくるときに働く重力の法則か何かのように、それらの生産に社会的に必要な労働時間が、諸交換関係を規制する自然法則として暴力的に自己を貫くからである²⁸。諸価値量が労働時間によって規定されということは、だから、相対的な諸商品価値の可視的な諸運動という外観に覆われた秘密なのである。この秘密の発展は諸価値量の単に偶然的な規定という外観を諸労働生産物から剥ぎ取るとはいえ、けっしてそれらの物的な形態を剥ぎ取ることとはしない。

人間の生活の諸形態について深く考えること、したがってそれらについての科学的分析は、一般に実際の発展を遡行するという途を辿るものである。それは祝宴の終わりに、したがって発展の過程の最終的な結果とともに始まるのである。諸労働生産物に諸商品という刻印を捺し商品流通の前提であるこの諸形態は<90>、人々が自らこれらの諸形態——人々にとってはむしろすでに不変なものとなっている——の歴史的な性格についてではなく、それらの諸像について説明しようとする以前に、すでに社会的生活の自然な諸形態という固定性を得ている。価値諸量の規定に導いたのが将に諸商品価格の分析であったように、諸商品の価値性格へと導いたのは、将に共通な諸商品の貨幣表現だったのである。が、将に商品世界のこの完成形態—貨幣形態—こそが私的な諸労働の社会的性格、したがって私的労働者の社会的な諸関係を明らかにするのではなく覆い隠すのである。上着やブーツなどが抽象的人間労働の一般的な体现者である亜麻布と関係すると私が言いでもしようものなら、この表現が狂ったものであることはすぐに理解される。だが、上着やブーツの生産者などがこれらの商品を、一般的等価物である亜麻布と——金及び銀であっても同じことなのだが——関係させるとき、彼らの眼には、彼らの私的な諸労働と社会的総労働との関係が、将にこの狂った形態で現れるのである。

ブルジョワ経済学の諸範疇を構成しているのは、これらの類の諸形態である。これこそ社会的に通用し、したがってこの歴史的に規定された生産様式、すなわち商品生産という諸生産関係に対応する客観的な **Gedankenformen** 諸思想形態である。商品世界の秘密の全て、すなわち労働の生産物を商品生産の基礎の上で包み込むこの魔術と妖怪の全ては、われわれが別な諸生産形態に飛び立つや忽ち消え失せる。

政治経済学はロビンソン物語を愛好する²⁹。だから、まず自分の島にいるロビンソンを登場させよう。生まれつき von Haus aus 控え目な性格だとはいつても、彼も多様な種類の必要を充たさねばならず、したがって多様な

28 「人は定期的な革新を通して自己を貫いている可能性のある法則を何だと考えるのであろうか？」(Friedrich Engels「国民経済学大綱」、Arnold Ruge 及び Karl Marx 編『独仏年誌』(1848年)所収)。Dietz 全集第1巻, 515頁(原著)。

29 第二版への注。リカードにもロビンソン物語がある。「リカードは、原始の漁師や狩人を商品所有者として彼らに直ちに魚や獲物を、同じ交換価値に対象化された労働時間に応じて交換させる。その際彼は、原始の漁師や狩人は労働用具の見積りに 1817年のロンドンの取引所で通用している年金表から金利を引っ張り出すという時代錯誤に陥っている。‘オエン氏の平行四辺形’は、彼がブルジョワ社会の外では実現できない独自の社会形態のようにみえる。」(Karl Marx, "Zur Kritik etc.", p.38, 39. <Siehe Band 13, S.46.)

種類の有用労働を行い、道具をつくらなければならない。家具を整え、<91>ラマを飼い、釣りや狩りをするなど。祈りなどについてはここでは言わない。なぜならわがロビンソンはそれにたのしみを見出し、同種の行為を Erholung 休養だと考えている。自身の生産的な諸役割が多様であるにもかかわらず、彼は、それらの役割が同じロビンソンの諸活動形態であることを、したがって人間労働の多様な諸様式にすぎないことを知っている。窮乏は彼を強いて、彼の時間を多様な役割に正確に配分させる。それぞれが彼の活動全体のなかでどれほど大きなあるいは小さな領域を占めるかは、企図された有用効果を達成するために克服しなければならない困難の度合いによる。経験がそれを教える。そこでわがロビンソンは、時計、台帳、インクそしてペンを難破船から取り出して、善良なイギリス人らしく直に自分で帳簿をつけ始めるのである。彼の *Inventarium* 資産台帳には、彼が所有する諸使用対象の一覧表、それらの生産に必要な様々な仕事の一覧表、そして最後にこれら様々な生産物の一定量のために平均的に要する時間の一覧表が含まれている。ロビンソンと彼の自家製の富を構成する諸物とのあいだの全ての関係は、ここではとても単純で透明であるから、M. Wirth 氏がこの関係を特殊な知力など用いることもなく理解するのももつともである。が、その関係のなかには、価値規定の全ての本質的な諸内容が含まれている。

さて、ロビンソンの明るい島から薄暗いヨーロッパの中世に移ろう。独立の男に代わってここに居るのはどれも依存しあう人々——*Leibeigne* 農奴と *Grundherrn* 地主、*Vasalle* 家臣と *Lehnsgeber*=*Lehensgeber* 領地を授与する者 (eng. *suzerain*, 領主、宗主)、*Laien* 俗人と *Pfaffen* 坊主——である。物的な生産の社会的な諸関係を、またその上に築かれる生活の諸領域を同じように特徴づけているのは、人格的な依存である。が、人格的な諸従属関係が所与の社会の基礎をなしているのだから、諸労働も諸生産物もそれらの現実とは違う幻想的な姿を纏う必要はない。それらは *Naturaldiensten* 賦役や *Naturalleistung* 年貢 (payments in kind, 物納税) として社会の機構のなかに入っていく。労働の自然形態すなわちその特殊性は、商品生産に基づくような労働の一般性ではないものが、ここでは直接に社会的な形態なのである。*Die Fronarbeit* 賦役は商品を生産する労働と同様に時間で量られるとはいえ、農奴の各々は、彼が賦役の形でその領主に譲渡するものが彼の個人的な労働力であるのを知っている。坊主に貢がれる十分の一税は坊主の説教より分かり易い。だから、人々がここで向かい合う際に着けている諸仮面がどのように評価されようとも、人々の諸労働における社会的な諸関係はどの場合にも彼ら自身の人格的な諸関係<92>として現れるのであって、諸物の、すなわち諸労働生産物の社会的な諸関係にくるまれて現れることはない。

共同の、言い換えれば直接に社会化された労働を考察するのに、あらゆる文化国民の歴史の始まりに見られるそれらの自然発生的な形態にまで舞い戻る必要はない³⁰。一つの身近な例は自らの必要を充たすために穀物、家畜、より糸、亜麻布、衣服などを生産する農夫家族の素朴な家父長制的勤労である。これらの

30 第二版への注。「自然発生的な共有財産制の形態は特殊な、それどころかロシアにのみ固有な形態である、との見解は近時広められた啞うべき偏見である。自然発生的な共有財産という形態は、ローマにもゲルマンにもケルトにも存在していたことが証明できるものであって、それらのうち多様性を帯びた完全な見本は、今でもまだ、たとえ部分的には朽ちているとはいえ、インドに見出される。アジア的な共有財産形態の段階は、より厳密には、特にインド的な共有財産の諸形態に見出される、それは自然発生的な共有財産制の様々な形態からそれから溶解した様々な諸形態が生じたのと同様である。だから例えば、ローマ的及びゲルマン的な私有財産制がインド的な共有財産制の様々な諸形態に由来するということもあるのである。(Karl Marx, "Zur Kritik etc.", p. 10. <Siehe Band 13 unserer Ausgabe, S.21>)

様々な諸物は農夫家族の労働の様々な生産物として向かい合うが、諸商品として交換されることはない。これらの生産物を生産する労働、すなわち耕作、牧畜、紡績、機織り、仕立て仕事は、それらの自然形態を纏った社会的な諸機能である。というのは家族の諸機能は、商品生産がそうであるように、彼ら独自の自然発生的な労働分割をもたらすからである。と同様に、家族全体と個々の家族構成員にどのように労働時間を分割するのか規制するのは、性差、年齢差、及び季節ごとに変化する労働をとりまく自然の諸条件である。個人の諸労働力の支出が継続時間で計量されることは、ここでは、本来的に労働そのものの社会的な諸規定内容として現れる。というのは、個人の諸労働力は、本来、将に家族がもつ共同の労働力の諸器官であるかのように作用するからである。

最後に、気分を変えるために、自由な人々の共同体を想像してみよう。それは共有の生産手段をもって彼らの労働力が支出される共同体である。ロビンソンの労働の諸規定内容がここでもまた現れる。ただし、個人的な労働の規定内容ではなく、将に社会的な労働の規定内容が現れるのである。ロビンソンの生産物の全ては彼だけの個人的な生産物であり<93>、したがって彼のための直接的な諸使用対象であった。共同体の総生産物は社会の生産物である。これら生産物の一部は再び生産手段として役立つ。この部分は社会的なものであり続ける。が、もう一方の部分は共同体の成員によって生活手段として消費される。だからこの部分は彼らのあいだに配分されなければならない。この配分方法は社会的な生産機構の特殊な方法によって、またそれに対応する生産者たちの歴史的な発展度によっていろいろである。われわれは商品生産の場合と同様、諸生産者の各々の部分がどれだけになるかはその部分がおこなう労働時間によって決まるものと仮定する。だから労働時間は二重の役割を果たすであろう。労働時間の社会的で計画的な配分は様々な労働の諸機能をさまざまな必要への適切な割り振りを規制する。他方、同時に労働時間は生産者たちを共有の労働の個々の諸部分に振り分ける際の **Maß** 物差しになり、したがって共有の生産物のどれだけを消費可能な部分を個人的に振り分けるかの物差しになる。諸労働及び諸労働生産物に対する人々の社会的な関係は、ここでは生産においても分配においても透明で単純である。

生産者たちがその諸生産物に対し諸商品すなわち諸価値として関係するということが、またこの物的な形態に包んで彼らの私的な諸労働を同じ人間労働として相互に関係させるということが、商品生産者たちの社会の一般的な社会的生産関係をなしている。抽象的な諸人間を崇拜する、とりわけそのブルジョワ的發展であるプロテスタンティズムや **Deismus** 理神論などのキリスト教がそのような社会にとっては最もふさわしい宗教形態である。古代アジア、古典古代等々の諸生産様式においては、共同体が没落段階にあればそれだけ、生産物の商品への転化、したがって人々の定在の商品生産者への転化が重要な役割を演じた。本来の商業の民は **Epikurs** エピクロスの神々やポロラントの社会の気孔のような昔の世界の隙間に存在した。かの古い社会の **Intermundien** *生産機構はブルジョワ的なそれに比べずっとシンプルで透明性があるが、この機構は人を同じ種族に属している他人と自然とに繋ぐへその緒から切り離されていないという諸個人の未成熟あるいは主従関係に基づいている。この機構は低い労働生産力の発展段階、そしてそのことに対応して物質的生活の生産過程内部での人々相互の限定された関係、つまり人間相互の関係と人間と自然との関係によって規定されている。

<94>これらの現実的制限は理念の上では自然宗教と民族宗教に反映している。現実世界の宗教的な反映は、実際の勤労日の生活と人々との諸関係が、人間の相互的な関係についても自然との関係についても、日々透明な関係として表れるようになればすぐにも消失する。社会的な生活過程すなわち物質的な生産過程の像は、社会的な自由を獲得した諸人間の生産物が意識的に計画的な制御のもとに置かれるようになればすぐに、神秘的な霧のヴェールを脱ぎ捨てる。だがそうなるには、ある社会の物質的基礎あるいは一連の物質的な諸生存条件—それ自体はさらに長い苦しみに満ちた発展の歴史をなしている—が必要である。

政治経済学はたとえ不完全だったとはいえ³¹、価値と価値量とを分析し、それらの形態に隠された中身を確かに発見していた。<95>だが政治経済学は、なぜこの中身がかの形態を纏い、なぜ労働が価値で表現されるのか、またその継続時間によってその大きさをはかるという労働の尺度が労働生産物の諸価値量で表現されるのか³²、という問いを一度も発したことがない。諸形態—生産過程が人々支配し、人はまだ生産過程を

* 訳者注 **Intermundien** (Metakosmien; *metakosmion*, *intermundium*): Zwischenwelten, Raum zwischen den Welten, in welchem nach EPIKUR die Götter ein seliges Leben führen, unbeeinflusst vom irdischen Treiben. Sie wohnen *en kosmô kai metakosmiô*, *ho legomen metaxy kosmôn diastêma* (Diog. L. X, 89; vgl. CICERO, *De divin.* II, 17, 40; LUCRETIVS CARUS, *De rer. nat.* II, 23, V, 146 squ.). <http://www.textlog.de/4062.html>

31 リカードオによる価値量分析の欠陥—それは最良の分析なのだが—についてはこの本の第三巻および第四巻において示されよう。価値一般について云えば、古典派政治経済学ははっきりとまた明確に意識しては、労働—価値において現われる労働—を、同じ労働—その生産物の使用価値において現われる労働—からどこにおいても区別してはいない。政治経済学は自然に、その間の区別を事実上おこなっている。というのはあるときにはそれは労働を量的に、また別なときには質的に考察しているからである。だが経済学は、諸労働の単に量的な相違は労働の質的な統一性あるいは同一性を、したがってその抽象的な人間の労働への還元を前提するとは考えないのである。例えばリカードオは **Destutt de Tracy** が次のように言うとき、それに同意することを明言している：確かにわれわれの肉体的及び精神的資質は一体としてわれわれに生まれながらに備わった財産である。だからこの財産の利用、すなわちある種の労働はわれわれが生まれながらにもっている **Schatz** 財宝なのである；われわれが財産と呼ぶすべての諸物を創造するのは常にその利用なのである…。加えて、すべての諸物はそれらを創造した労働だけを表しており、またそれらの諸物がある一つの価値をもつのであれば、あるいは異なる二つの価値までもつとすれば、それら諸物は価値をやはりそれらを生み出す労働の *dem* それ（「価値」「*dem Wert*」の略—筆者）から受け取るということも確かである。」(Ricardo, „*The principles of Pol. Econ.*“, 3.ed., Lond. 1821, p.334. (pp.284-285. in 1st.. volume of the works and correspondence of D. Ricardo ed. by P. Sraffa, Cambridge, 1951.『経済学及び課税の原理』、1952. 岩波文庫版、下、19 頁。) われわれはただリカードオは **Destutt** が述べたよりも深い意味を読みとっておきながらそのことを **Destutt** のせいにしたということだけを仄めかしておこう。実際 **Destutt** は、財産をなすすべての物は「それを創造した労働を表す」と一方では言っていないが、他方で諸物はその「二つの異なる諸価値」（使用価値と交換価値）を「労働の価値」から受け取るという。そのことで **Destutt** は俗物経済学の浅薄さのなかに転げ落ちるのである。この経済学はある商品の価値（ここでは労働の価値）を前提する。そうすることにより後で他の諸商品の価値を規定するためである。リカードオは **Destutt** の文章を次のように読むのである。すなわち、労働（労働の価値ではなく）は使用価値でも交換価値でも現われるのだ、と。だがリカードオ自身は労働の二重の性格—これらは二重に表される—をほとんど区別しないから、「価値と富、それらを区別する諸属性」という章（リカードオ「*原理*」第 20 章—筆者）の全体を通じて **J.B.Say** の取るに足りない議論に苦勞しなければならぬのである。だからリカードオは、**Destutt** が価値源泉としての労働については確かに彼自身と同じで、にもかかわらず他方、価値概念については **Say** と同じだということに（「*原理*」第 20 章の—筆者）最後のところでひどく驚くのである。

32 商品及び殊に商品価値の分析から価値を交換価値となす価値の形態を発見するのに成功しなかったことは、古典派政治経済学の根本的欠陥である。古典派政治経済学はアダム・スミスやリカードオのような最良の代表者でさえ、価値形態を何かまったくどうでもよいもの、あるいは商品の本質にとっては外的な事柄として取り扱っている。彼らが価値量の分析に注意のすべてを引きつけられているということだけがその原因ではない。原因はもっと深いところにある。労働生産物の価値形態はブルジョワ的生産様式の抽象的な、だが同時に一般的な形態である。ブルジョワ的生産様式はこのことによって（hierdurch、「このこと」は「労働生産物の価値形態がブルジョワ的生産様式の一般的な形態である」ことをさす。—筆者）特殊な種類の社会的生産になり、またそのことによって歴史的に特徴づけられるのである。すなわちそれを社会的生産の永遠に続く自然形態だと見なす

支配してはいないとその額に記されている **Gesellschaftsformation** 社会機構に属している——が、人々のブルジョア意識にとっては、生産的労働そのものと全く同様に自明な自然必然性(自然で必然的なこと)である。<96>ブルジョア社会以前の社会的な **Produktionsorganismus** 生産機構がもつ諸形態は、だから、教父によってキリスト教以前の諸宗教が論じられるように取り扱われるのである³³。

<97>一部の経済学者は商品世界に貼り付く呪物崇拜または社会的な労働の諸規定内容の对象的な外観によって欺かれている。同様に、とりわけ退屈なほど味気ない論争では交換価値の形成における自然の役割の証明がテーマとなっている。交換価値は物に転化した労働を表すための一つのお決まりの社会的な様式なのであるから、為替相場といったものと同様に全くもって自然素材とは関係がない。

ならば、価値形態が、すなわち商品形態が、さらに発展しては貨幣形態が、資本形態などが特別なものであることを必ず見逃すことになる。

だから古典派経済学——それは労働時間により価値量を計測することについては全面的な意見の一致を見ているのだが——は雑多なことこの上ない貨幣観念、また矛盾していることこの上もない様々な貨幣観念、すなわち様々な一般的等価の完成した像を見いだすのである。この問題は例えば銀行制度——ありきたりの貨幣の諸定義をもってしてはそれには歯が立たない——を取り扱う際にはっきりと現われることになる。だからこれに対抗して修正された重商主義(**Ganilh** など)——価値に社会的な形態だけを見、あるいはむしろ内容のない見かけの姿だけを見る——が生じたのである。——(私の立場を——訳者)ははっきりさせるためにいうのだが、古典派政治経済学の語をもって私が理解しているのは、W. Petty 以降のすべての経済学である。これらの経済学はブルジョア的生産諸関係の内的な関連を研究するものである。これに対して俗流経済学というのは眼に見える諸関連のなかだけをうろつきまわって、いわゆるもつとも粗雑な諸現象をもつともらしく解説し、またブルジョアの需要に向けて科学的経済学がとくに提供した題材を繰り返して提供するだけである。その他にやっていることはといえば生産当事者たちが自分たちの最良の世界について語る月並みで傲慢な空想話を体系化し、それを自慢し、永遠の真理だと宣言するくらいのものである。

33 「経済学者たちは特別のやり方をする。彼らにとっては人工的なものと自然なもの、ただ二つの **Institutionen** 制度があるだけである。封建制の諸制度は人工的で、ブルジョア的なそれは自然な制度だというのである。その点で彼らは神学者たち——宗教を二つの種類に区別する——と似ている。彼らのものではない宗教は人間の考案によるものであり、一方彼ら自身の宗教は神の啓示である。——こうして一つの歴史が与えられるのだが、別の歴史はないのである。」(Karl Marx, „Misère de la Philosophie. Réponse a la Philosophie de la Misère de M. Proudhon“, 1847, p. 113. マルクス『哲学の貧困』、大月書店全集・第四巻、139(原)頁。) 本当に滑稽なのは **Bastiat** である。彼は古代のギリシャ及びローマは略奪だけで生きていたと思いこんでいる。古代ローマから何世紀ものあいだにも人は生きていたのだから、何か盗む物がなければならなかつたらうし、あるいは略奪品が常に絶え間なく再生産ならなかつたらう。だから明らかにギリシャもローマも生産過程、すなわち経済——ブルジョア経済が今日の世界の物質的な基礎をなしているのとまったく同じようにその世界の物質的な基礎をなしていた——をもっていたのである。それとも **Bastiat** が本当に云いたかつたのは奴隷労働に基づいている生産様式は **Raubsystem** 略奪制の上に乗っているというようなことだったのだろうか？ それなら彼は危うい基盤の上に立っていることになる。アリストテレスのような大物哲学者でさえ奴隷労働の評価を誤るのに、**Bastiat** のようなとるに足りない経済学者が賃労働の評価において正しいと云うことがあり得ようか？ ——1859年に『政治経済学批判』刊行された際にドイツ・アメリカ新聞によって唱えられた異議に対して、この機会に手短かに反論しておくことにしよう。この新聞は、一定の生産様式と常にそれに対応する生産諸関係、つまり「社会の **ökonomische Struktur** 経済構造が本当の基礎をなすはずであって、その上に法的及び政治的構造物 **Überbau** が立ち上がり、またこの構造物には一定の **Bewußtseinsforme** 社会的な意識の諸形態が対応する」(**Dietz** 全集・第四巻、139頁を見よ。)、言い換えれば、「物質的生活の生産様式は社会的、政治的、宗教的な生活過程の全般を規定する。」(**Dietz** 全集第13巻、8/9頁を見よ。)という私の考えのすべては物質的な利害関係が支配する今日の世界については正しいとしても、カトリック教が支配した中世、及び政治が支配したアテネとローマについては正しくない、と述べたのである。なによりもまず奇妙なのは、中世や古代世界について世界的に知られているきまり文句を知らない者がいると前提することを好む者がいるということである。中世もカトリック教によっては、また古典古代の世界も政治によっては生活することができなかったということは大いに明らかである。彼らが生活を得ていたその方法と様式とが逆に説明するのは、なぜあの時代には政治が、そしてこの時代にはカトリック教が主役を演ずるかである。それはそうと、例えばローマの共和制の歴史について少しだけでも知っていれば、土地所有の歴史がその隠された歴史であることに気付くものである。遍歴する騎士道はどのような社会の経済諸形態とも調和するなど妄想したことへの償いをドンキホーテは疾うに果たしたというのに。。

商品形態はブルジョワ的な生産物の最も一般的で最も未発展な形態なのであり、たとえ同じように優勢ではなく、したがって今日のように社会を特徴づける様式ではなかったとしても、早くから登場するのであるから、比較的容易にその呪物的性格を見抜くことはできる。もっと具体的な諸形態では、この単純さそのものは消えている。貨幣制度に付随する錯覚はその源をどこに発するのか？ 金や銀を見ても、それらが貨幣として一つの社会的な生産関係を、とはいっても奇妙な社会的な諸属性をもっている諸自然物という形態で表していることは分からない。そして現代の経済学—世間をあざ笑う貨幣制度の上に構想されている—は、資本を取り扱うやいなや呪物崇拜に囚われてはいないか？ 地代は社会からではなく土地から発生するとした重農学派の幻想が萎んでからどれだけ経つだろう？

先走り为了避免するには、商品形態そのものに関連する一例で十分である。商品がしゃべれるものなら、われわれの使用価値は人々の関心を引かないかも知れない、と語るであろう。Er kommt uns nicht als Dingen zu. 使用価値は諸物であるわれわれに帰属するものではない。物としてのわれわれに属するものは、われわれの価値である。商品という諸物としてのわれわれの交流がそのこと証明している。われわれはただ諸交換価値として互いに関係し合っている。今や人は経済学者が商品の魂から発することを次のように語るのを聴く：

「Wert 価値」(交換価値)「は諸物の **Eigenschaft** 属性であり、富」(使用価値)「は人々の属性である。価値はこの意味において必然的に交換を含んでいるが、富はそうではない。」³⁴ 「富」(使用価値)「は人々の **Attribut** 属性であり、価値は商品の一属性である。一人の人あるいは一つの共同体は富んでいる；一個の真珠またはダイヤモンドは大きな価値をもつ... 一個の真珠またはダイヤモンドは真珠またはダイヤモンドとして価値をもつ。」³⁵

<98> これまでのところ真珠やダイヤモンドのなかに交換価値を発見した化学者などいない。化学的実体の経済学的発見者は、ことさら批判的な掘り下げを要求するのだが、彼が発見するのは、諸物の使用価値はそれらの物的な諸属性とは無関係で、にもかかわらずそれらの価値は諸物としてのそれらに帰属するということである。これに関連して諸物が証明するのは、人々にとって諸物の使用価値は交換なしに実現され、したがって物と人との直接的な関係においては、それらの価値は逆にただ交換すなわち一つの社会的過程においてのみ実現されるという奇妙な状態である。ここでのろまの **Seacoal** に次のような教えを垂れる善良な **Dogberry** を思い出さない者は無かろう：

³⁴ "Value is a property of things, riches of men. Value, in this sense, necessarily implies exchange, riches do not." in 'Observations on some verbal disputes in Pol. Econ., particularly relating to value, and supply and demand', London. 1821, p. 16. この文章をマルクスは"Wert" (Tauschwert) "ist Eigenschaft der Dinge, Reichtum" (Gebrauchswert) "des Menschen. Wert in diesem Sinn schließt notwendig Austausch ein, Reichtum nicht.と訳している。(S.97.)

³⁵ Riches are the attribute of man, Value is the Attribute of commodities. A man or a community is rich, a perle or a diamomd is valuable. ... A perle or diamond is valuable as a perle or diamond. (S. Bailey, A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Values, p.165.)

„ Ein gut aussehender Mann zu sein ist eine Gabe der Umstände, aber lesen und schreiben zu können kommt von Natur." 「人の見栄えは運次第、だが読み書きの力は生まれながらのものよ。」³⁶

³⁶ 「観察」の編者と S.Baily はリカードは交換価値を単に相対的であるものから絶対的なものに変えてしまったと非難する。逆である。リカードは、これらの物、ダイヤモンドや真珠などは諸交換価値としてもっている *Scheinrelativität* 外観上の相対性を外観の背後に埋め込まれ隠された本当の関係に、すなわち人間の労働の単なる諸表現の相対性に帰着させた。リカードが Baily に大雑把に答えるのだが、その答えには決め手がない。それは将に彼らがリカード自身と同様に価値と価値形態あるいは交換価値とのあいだの内的な関係についての説明を見出していないためである。